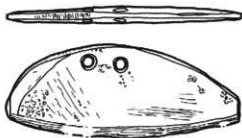


(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第91輯

志 紀 遺 跡

大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書



1 9 9 5

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第91輯

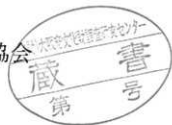
志 紀 遺 跡

大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書



1 9 9 5

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



カラー図版1



志紀道跡の水田と田井中遺跡の集落をとりまく環境

カラー図版 2



弥生時代前期石砲丁

序 文

八尾市は古来より大和川を中心に水陸交通の要衝として文化の栄えたところであります。東方、信貴山・高安山の麓には心合寺山古墳や高安千塚古墳群が営まれ、西方の平野部には地下深くに弥生時代や古墳時代の遺跡が埋もれています。また、江戸時代に大和川が付け替えられて以後は、新田で綿作りがさかんに行われ、河内木綿として全国に出荷された記録もあります。

志紀遺跡も平野部の地下深く埋もれていた遺跡で、大阪府教育委員会を中心に昭和58年以降、20カ所以上の発掘調査を実施してまいりました。今回は府営住宅建設にともなって発掘調査を実施、弥生時代から平安時代・鎌倉時代にいたる各時代の水田遺構を調査し、当時の水田の実態を知る上で貴重な資料を得ることができました。

また、調査区の西では弥生時代中期に営まれた8条の大溝群も発見されました。大溝群は調査区の西方に広がる田井中遺跡の集落と東方に広がる志紀遺跡の水田を区画していたものと推定され、低湿地に位置する集落の生活を守る機能と、水田耕作に欠かせない水を管理する機能をもっていたと考えられます。

ここに報告書を刊行するにあたり、調査に御尽力いただいた方々に深く感謝するとともに、今後とも御協力賜るようお願いする次第であります。

平成7年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 岩井幹郎

例 言

1. 本書は大阪府建築部の依頼を受け（財）大阪府埋蔵文化財協会が平成5年度に実施した八尾市志紀町西1丁目所在、大阪府営八尾志紀住宅建て替え建設に伴う志紀遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は（財）大阪府埋蔵文化財協会技師 西川寿勝を担当者とし、1993年7月26日着手、1994年3月25日に整理作業を含むすべての事業を終了した。
3. 本書の編集・執筆は西川が担当し、自然遺体の分析および執筆については渡辺正巳（川崎地質株式会社）をお願いした。
4. 調査にあたり、次の各氏から御指導をいただいた。記して感謝いたします。
赤木克視、江浦洋（財団法人大阪文化財センター）、工業普通、松沢亜生、松井章（奈良国立文化財研究所）、佐原真（国立歴史民俗博物館）、岡村道雄、松村恵司、西田健彦、坂井秀弥（文化庁記念物課）、亀島重則、阪田有功、福田英人、藤田道子、中村清美（大阪府教育委員会文化財保護課）、趙哲済（財団法人大阪市文化財協会）、米田敏幸、沼 斎、吉田野乃（八尾市教育委員会）、原田昌則、成海佳子、西村公助（財団法人八尾市文化財調査研究会）、中川義朗（阪南市教育委員会当時）、森勇一（三重大学生物資源学部昆虫学研究室）
5. 発掘調査は国土座標第VI系を基準に4 mメッシュの地区割りを行った。また、これとは別に二つにわかれた調査区を西区、東区と呼称した。挿図及び文中の方位は座標北を、標高はT. P.（東京標準海面標示）を示す。
6. 遺構写真撮影は西川が、航空写真撮影はワールド航測株式会社が、遺物写真撮影は小倉 勝による。

本文目次

序文	
例言	
第I章 志紀遺跡の位置と環境	1
第II章 発掘調査の経緯	5
第III章 層序	11
第IV章 調査	17
第V章 まとめ	61
付 載 志紀遺跡(93-西区)における花粉・珪藻分析	67

挿図・表目次

第1図 周辺遺跡分布図	3
第2図 志紀遺跡調査区配置図	7
第3図 志紀遺跡地区割図	8
第4図 東区土層図	12
第5図 西区土層図1	13
第6図 西区土層図2	14
第7図 第1遺構面出土土器実測図	18
第8図 第1遺構面全体図	19
第9図 第2遺構面上層洪水層および第2遺構面出土土器実測図	22
第10図 第2遺構面全体図	23
第11図 第3遺構面全体図	27
第12図 第3遺構面出土土器実測図	28
第13図 第3遺構面出土土器実測図	29
第14図 第4遺構面・第4遺構面直下の溝出土土器実測図	32
第15図 第4遺構面全体図	33
第16図 第4遺構面出土土器実測図1	34

第17図	第4遺構面出土木器実測図2	35
第18図	第4遺構面直下の遺構図	37
第19図	第5遺構面上層洪水層出土土器実測図1	39
第20図	第5遺構面上層洪水層出土土器実測図2	40
第21図	東区 第5遺構面全体図	41
第22図	西区 第5遺構面出土土器実測図	43
第23図	西区 第5遺構面出土遺物分布図	45~46
第24図	西区 第5遺構面大溝群土層図	47~48
第25図	西区 第5遺構面遺構図1	52
第26図	西区 第5遺構面遺構図2	53
第27図	東区 第6遺構面出土遺物実測図	56
第28図	東区 第6遺構面・第7遺構面全体図	57
第29図	第7遺構面出土遺物実測図	59
第30図	東区 遺構変遷図	62
第31図	西区 遺構変遷図	63
第32図	弥生時代中期の集落域・生産域想定図	65
第1表	志紀遺跡内調査区一覧表	6
第2表	各遺構面水田計測表	60
写真1	第2遺構面出土土器	24
写真2	第3遺構面出土土器	30
写真3	第4遺構面直下の溝4下-1土器発見状況	38
写真4	弥生時代前期水田遺構と地域の子供達	58

付 載 挿 図

第1図	花粉分析試料採取地点	67
第2図	花粉分析処理フローチャート	68
第3図	珪藻分析処理フローチャート	68

第4図	志紀遺跡(93西区)の花粉ダイアグラム	73
第5図	大溝5-1の花粉ダイアグラム	74
第6図	大溝5-3の花粉ダイアグラム	74
第7図	大溝5-4の花粉ダイアグラム	74
第8図	大溝5-5の花粉ダイアグラム	74
第9図	大溝5-7の花粉ダイアグラム	75
第10図	大溝5-8の花粉ダイアグラム	75
第11図	大溝5-1の珪藻ダイアグラム	75
第12図	大溝5-1の珪藻総合ダイアグラム	75
第13図	大溝5-5の珪藻ダイアグラム	76
第14図	大溝5-5の珪藻総合ダイアグラム	76
第15図	大溝5-8の珪藻ダイアグラム	76
第16図	大溝5-8の珪藻総合ダイアグラム	76

図版目次

巻頭カラー図版1	志紀遺跡の水田と田井中遺跡の集落をとりまく環境
巻頭カラー図版2	弥生時代前期出土土石甎丁
図版1~2	遺跡遠景航空写真
図版3~6	調査区遠景航空写真
図版7~9	調査区全景航空写真
図版10~14	東区 第1遺構面
図版15~17	西区 第1遺構面
図版18~21	東区 第2遺構面
図版22~24	西区 第2遺構面
図版25~27	東区 第3遺構面
図版28~30	西区 第3遺構面
図版31~33	東区 第4遺構面
図版34~36	西区 第4遺構面
図版37~38	東区 第5遺構面

図版39～50	西区 第5遺構面
図版51～52	東区 第6遺構面
図版53	東区 第7遺構面
図版54～55	発掘調査を知ってもらおう!
図版56	第1遺構面出土土器
図版57	第1遺構面下層洪水層出土遺物
図版58	第2 第3遺構面出土土器
図版59～60	第4遺構面出土土器
図版61～62	第4遺構面下層洪水層出土土器
図版63	第5遺構面大溝出土土器
図版64	第5遺構面大溝周辺出土遺物
図版65	第6遺構面出土遺物
図版66	第7遺構面出土土器
図版67～68	第3遺構面・第4遺構面出土木器
図版69～70	第4遺構面出土木器
図版71	各遺構面出土花粉化石

第 I 章 志紀遺跡の位置と環境

志紀遺跡は大阪府八尾市に所在する縄紋時代晩期から鎌倉時代に及ぶ水田遺構を中心とした遺跡である。その周囲には東に生駒山地、南に金剛山地を仰ぎ、両山地の谷間から奈良方面の水を集めた大和川が北上していた。遺跡はまさに大和川が河内平野に流れ込む入川部に位置する。しかし、大和川は河内にたどり着くと幾重もの支流に分岐し、その流路は判然としなかった。この川は時として中河内地方を洪水に巻き込み大量の土砂を堆積させる源でもあった。このようにして、かつての河内湾は弥生時代以降に、河内湾は古墳時代以降に急激に縮小し、低湿地へと姿を変えた。そして、志紀遺跡も激しい堆積を繰り返しながら大阪城を北に望む近世を迎える訳である。

大和川は江戸時代前期に付け替えられ、その流水を真西の堺方面の海域に流し出す様になる。人工による大和川の流路変更はかつての流路であった中・北河内方面に多大な耕地を提供し、河内木綿等の新しい産業も開花させた。ところが、新大和川が注ぎ込む堺の港は土砂の堆積によって埋め立てられ、付近の水深も浅くなり、中世以降栄華を誇った自治都市にかげりをもたらす結果を生んだ。

縄紋時代の志紀遺跡は少量の遺物を検出するものの、顕著な遺構は発見されず、不明瞭な部分が多い。いわんやそれ以前の様相は現地表から5 m以上も埋もれており、語る事ができない。縄紋時代晩期を中心とする集落は、西に長原遺跡、東に船橋遺跡があり、志紀遺跡は両者の中間に位置する。長原遺跡では縄紋時代晩期の遺構とともに弥生時代前期後半の土器等が共存し、籾の痕跡をもつ土器や穂積み具等、農耕の存在が看取できる⁽¹⁾。一方、船橋遺跡は長原遺跡よりどの程度遡る集落なのかは判然としないが、縄紋時代晩期の遺構や遺物に農耕の痕跡は認められない⁽²⁾。志紀遺跡に隣接する田井中遺跡では、弥生時代前期後半の遺物に混ざって少量の縄紋時代晩期の遺物が認められる⁽³⁾。いずれも集落に伴う包含層の遺物でその実態の解明にまでは至っていない。志紀遺跡において、縄紋時代晩期の遺物が水田遺構に伴うものなのか、伴わないものなのか解明されれば、この地に初めて農耕をもたらせた人々の様子を復元するうえで重要な鍵になると思われる。

弥生時代前期以降古墳時代後期まで、志紀遺跡は度重なる洪水に大地を埋め立てられながら積極的に小区画水田による農耕を営んできた。特に、弥生時代中期には西に広がる田井中遺跡の集落の生産域として位置付けられる痕跡が解明されつつあり、水田を中心に人々

が暮らしてきた様子がうかがえる。また、南に望む二上山は打製石器の原料のほぼ100%を担うサヌカイトの産地でもあり、ここを起点として等間隔に遺跡が続く⁽⁴⁾。志紀遺跡でも西に接する田井中遺跡を中心として北東に恩智遺跡⁽⁵⁾、北西に亀井遺跡⁽⁶⁾、南東に船橋遺跡⁽⁷⁾、南西に八尾南遺跡⁽⁸⁾が位置する。これらの集落遺跡から志紀遺跡まではほぼ2.5km、いずれも多重の環濠がめぐる集落ではないかと予想できる。

古墳時代前期の志紀遺跡は今まで明瞭に位置付けることができなかった。しかし、今回の調査で該当期の遺物が水田遺構に伴って発見されたこと、田井中遺跡の西方に位置する木の本遺跡に集落が発見されたこと⁽⁹⁾等、水田耕作や集落が継続して営まれていたことを雄弁と物語る資料が増えた。5世紀になって古市・百舌鳥古墳群を中心に巨大古墳が姿を現わす。志紀遺跡にも該当期の水田は継続して発見されており、古墳を営む勢力と米作りの関連を予想させる。このことは生駒西麓に群集墳が営まれる6世紀後半まで同様の様相を示す。水田耕作が有力農民を台頭させ、高安千塚古墳群やその南に接する平尾山古墳群、雁多尾畑古墳群を築いたとすれば水田の拡大は一連の中河内地域に及ぶだろう。

しかし、6世紀後半以降水田遺構の実体は明瞭でない。記紀によると、物部氏と蘇我氏が遺跡北方の渋川で戦い⁽¹⁰⁾、付近を本拠地とした物部一族が滅亡した時期に合致する。物部軍は水田の稲束で稲城を築いて防戦したとあり、周辺の耕作農民とも深いかわりがあったことがうかがえる記述である。飛鳥時代から奈良時代にかけては厚い洪水層によって遺跡は覆われる。幾度かの洪水の合間に水田耕作がおこなわれた痕跡も確認されているがその実体は不明瞭である。洪水層には飛鳥時代の土器や奈良時代の土器・瓦が含まれている。奈良時代の後半に道鏡によって弓削宮が遺跡南方に築かれたという記述もある。しかし、その痕跡はまだ確認されていない。

志紀遺跡では平安時代末から鎌倉時代にかけて営まれた条里制水田が大規模な整地土とともに発見されている。付近は『醍醐寺文書』⁽¹¹⁾に同寺による荘園管理がおこなわれていた記録が残る。発見された土器から鎌倉時代中期頃までは一連の耕作が続いていたと思われる。今のところ平安時代以前の条里遺構は発見されていない。平安時代末の開発で古い条里水田は削平されたと解釈すべきだろうか。

室町時代以降の水田面は近代の開発によって攪乱され、その実体が圍めていない。しかし、花粉分析によって水田の存在とともに、裏作で菜種や綿花の栽培があった実態を解明するに至った。これは周辺の遺跡から発見される鳥島遺構等とも関連するものだろう。



第1图 周辺遺跡分布图

＜註・参考文献＞

- (1) 『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ 大阪市文化財協会 1983
- (2) 『船橋遺跡』柏原市文化財概報1993-VI 柏原市教育委員会 1994
『船橋』Ⅰ・Ⅱ合冊 平安学園考古クラブ 1972
森浩一「大阪府船橋遺跡出土の縄文土器」『古代学研究』第18号 1968
- (3) 『田井中遺跡発掘調査概報』Ⅱ 大阪府教育委員会 1992
『田井中遺跡発掘調査概報』Ⅲ 大阪府教育委員会 1993
- (4) 塚田良道「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」『古代学研究』第122号 1990
蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983
- (5) 『恩智遺跡』Ⅰ～Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会 1980・1981
- (6) 『亀井遺跡現地説明会資料』大阪府教育委員会 1993
『亀井遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1989
- (7) 註(2)
- (8) 『八尾南遺跡—大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書』八尾南遺跡調査会 1981
『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1991
- (9) 『田井中遺跡発掘調査概報』Ⅲ 大阪府教育委員会 1993
- (10) 『日本書紀』卷第二十一 崇峻天皇条
- (11) 「志紀在」『角川日本地名大辞典』27 角川書店 1978
『醍醐寺文書目録』(長保6年・1004)「・・志紀於河等後宮田事・・」
(永承元年・1046)「志紀庄田与弘性院・・」
(承保4年・1077)「在河内郡志紀南条同北条・・」
(大治2年・1127)「御節供料群 志紀南北各二百枚」
(仁平元年・1151)「御酒番事 志紀南北・・各十日」
(仁平4年・1154)「寺家修理料繩 志紀南北庄・・」
(建長3年・1252)「拜堂布 志紀十八反阿南十八反」
(建長7年・1256)「拜堂布 志紀十八反阿南十八反」

第II章 発掘調査の経緯

1 これまでの調査

志紀遺跡は1982年より大阪府教育委員会・八尾市文化財調査研究会によって、府営志紀住宅建て替えに伴う調査等で明らかにされてきた遺跡である。現在まで9次、33調査区にわたって遺構が発見されてきた。(第1表・第2図)

大阪府教育委員会の試掘調査によって平安後期の遺構が発見されたことが契機となって本調査がはじまって以来、10年以上になる。当初は古墳時代後期の小区画水田と平安時代末の条里水田が連続し続く遺跡として認知されていた。第1次-C調査では古墳時代に遡るムシロが完全な形で発見された(完形では我が国最古の遺存例)。昭和60年からはじまった遺跡北西の調査(第4次-C・5次-A)では古墳時代の遺構面の下層を面的に試掘する機会があり水田遺構が弥生時代中期から折り重なって続くことが確認された。また、その調査では弥生時代中期の稲株跡も確認されている。平成3年度の第6次調査では弥生時代前期から13面以上の水田が度重なる洪水に埋め立てられ良好な形で遺存していることがわかり、報道提供の後に現地説明会および地元小学校を対象とした説明会もおこなわれた。さらに、平成4年度の第7次調査では弥生時代からの水田とその下層から縄紋時代晩期の土器が発見され、現地説明会や弥生文化博物館による記録映画も企画された。

このような経緯を経て、平成5年度本協会では府営住宅建て替えと八尾市立図書館建設予定に先だって2000㎡に渡る調査をおこなった。調査期間は平成5年7月から翌3月末までであった。調査区は東西2カ所に分かれ、西の調査区では弥生時代中期の環濠と思われる8条の大溝群が発見され、報道提供の後に、現地説明会や地元小学校を対象とした説明会をおこなった。大溝群は堤ごと弥生時代末の洪水層で覆われ、道状遺構や土橋も発見できた。これによって、田井中遺跡に広がる集落の人々は志紀遺跡の水田域を生産活動の場に行っていたことがうかがえる。

各遺構面の時期は下記に示すとおりである。しかし、時期を決定する資料は少なく、今後の調査でさらに限定できる可能性がある。また、各土層の土色も昭和60年の調査以降、対応関係を統一する試みがなされている(第5次-D立坑基本層序)。

第1遺構面 平安時代末～鎌倉時代(瓦器塊を伴う時期)

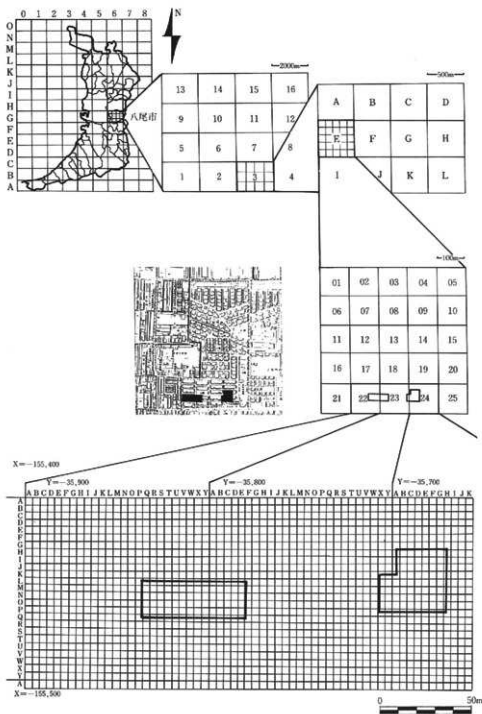
- a 奈良時代～飛鳥時代の土器を含む洪水層

年度	調査主体	次数・調査区名	調査期	調査区	調査の理由	調査担当者	調査概要	文献
1992	府教委		1992.7		府営住宅跡調査	大野 薫	平安時代土器出土	
1993	府教委	第1次調査 Aトレンチ			遺木礎建設	福田 英人	古墳時代水田	
		第1次調査 Bトレンチ			府営住宅建設 (1, 2, 3号棟)	山本 彰 飯田 育功 福田 英人		
		第1次調査 Cトレンチ			水道施設建設		ムシロ出土	
1995	府教委	第2次調査 Aトレンチ			水道施設建設		古墳時代鉄器水田	
		第2次調査 Bトレンチ	801112		府営住宅建設(6, 7号棟)	福田 英人	奈良時代～奈良時代末田、古墳時代長瀬水田	1
		第2次調査 Cトレンチ	～860331		防火木礎建設		水田	
八尾市 研究会	第1次調査	801200			合同庁舎建設(3号棟)		平安時代～鎌倉時代末田、奈良時代末田	
	第2次調査	～860331	300㎡		合同庁舎建設(4号棟)	成海 佳子	平安時代末～鎌倉時代末田、奈良時代末田	2
	第3次調査				浄化槽建設		平安時代末～鎌倉時代末田、奈良時代末田	
1986	八尾市 研究会	第4次調査	861210		合同庁舎建設(5号棟)		平安末、奈良、古墳中期以降の水田	
		第5次調査	～870323	1383㎡		合同庁舎建設(6号棟)	成海 佳子	平安時代末田、奈良時代末田
1987	八尾市 研究会	第6次調査	871124 ～871228	348㎡	合同庁舎建設(7号棟)	成海 佳子	平安時代末田、奈良時代末田	4
1988	八尾市 研究会	第7次調査	881001 ～880225	306㎡	合同庁舎建設(1, 2号棟)	成海 佳子	庄内式期～平安時代末の4時器水田 5世紀以前の集落	5
1989	府教委	第3次調査 Aトレンチ	891030		府営住宅建設(4号棟)	福田 英人		6
		第3次調査 Bトレンチ	～890931	3267㎡	府営住宅建設(5号棟)			
1989	府教委	第4次調査 Aトレンチ	890815		集合庁舎建設			
		第4次調査 Bトレンチ	～900323	3806㎡		福田 英人		
		第4次調査 Cトレンチ			調査地建設(上部)			
1990 ～ 1991	府教委	第5次調査 A地区		3500㎡	調査地建設(下部)			
		第5次調査 B地区	910801		下水立坑1	山田 隆一	奈良時代前期～江戸時代 13層以上の遺構跡確認	
		第5次調査 C地区	～920323		下水立坑2		奈良時代中期～小規模水田	
		第5次調査 D地区			下水立坑3		および雑居	
1991	八尾市 教委	第6次調査 91-A調査区	911001	2130㎡	府営住宅建設(9号棟)	大野 薫 山田 隆一 西川 寿勝	奈良時代前期～平安時代末田 奈良時代自然瓦路 奈良時代末瓦路	7
		第6次調査 91-B調査区	～920323	324㎡	受水溝建設			
1991	八尾市 研究会	志紀遺跡(91-318)	911007 ～08	75㎡	管理棟後建設		古墳時代前期以前水田 2層以上 古墳時代～中世の水田	8
		第1, 第2, 第3調査区						
1992	府教委	第7次調査 92-A調査区	920408 ～920510	100㎡	公共下水道工事	成海 佳子	奈良時代中期～平安時代末田	9
		第7次調査 92-B調査区	899623	3207㎡	府営住宅建設(10号棟)	高野 淳一	平安時代末の各層傾遺構(河堤)確認 奈良時代～古墳時代中期水田	
		第7次調査 92-C調査区	～920323	324㎡	防火木礎建設 下水立坑	中村 清典	奈良時代中期～古墳時代晩期遺構 縄文時代晩期相当遺構	10
1993	府文庫	第1次調査 93-A東区	930725	1000㎡	市立図書館建設予定地	西川寿勝	奈良時代前期～平安時代末田	
		第1次調査 93-西区	～940323	1000㎡	府営住宅建設(12号棟)		奈良時代中期8条の大溝跡 奈良時代中期～平安時代末田	
1993	八尾市 研究会	第9次調査	931301 ～25	100㎡	公共下水道工事	成海 佳子	奈良時代中期～平安時代末田	11

第1表 志紀遺跡内調査区一覧表(文献はP16)



第2図 志紀遺跡調査区配置図 (1/5000)



第3图 志纪遗址地区剖图 (1/2000)

第2遺構面 古墳時代後期（飛鳥寺下層土器の時期）

b 2面程度の水田面あり

第3遺構面 古墳時代後期（5世紀後半）

c 2面程度の水田面あり

第4遺構面 古墳時代（4～5世紀?）

d 弥生時代末期（庄内期）の洪水層

第5遺構面 弥生時代中期（いわゆる黒バンド）

e 薄い堆積層（いわゆる青バンド）

第6遺構面 弥生時代前期（いわゆる黒バンド）

f いわゆる青バンド

第7遺構面 縄紋時代晩期（長原式土器の伴う時期・いわゆる黒バンド）

g いわゆる青バンド

2 発掘調査の工法について

志紀遺跡は河内平野の沖積地に位置するため、現地表面を5mちかく掘り下げたところにも遺構面が存在する。志紀遺跡で最初に発掘調査がおこなわれた頃は、開地式の調査か、二段の切り盛りによる鋼矢板垂直掘りであった。平成2年度の調査でアースアンカー方式が試みられたが費用や調査区外の遺構に対する影響が問題点だった。平成3年度の調査で機械掘削は斜め勾配をつけて断面逆台形におこない、調査区外から鋼矢板を自立で打設し調査をするというY字形方式が試みられ良好な遺構観察や写真撮影、安全性が確認された。しかし、斜め勾配での土層観察や実測作業は危険を伴い、技術が必要である。

平成3年度以降の調査はおもにY字形方式が採用されている。今回の調査でも採用したのが調査区周囲から矢板を打設するクレーンを固定するスペースが取れなかった。そこで調査区内を機械掘削する以前に鉄板を敷き、アースウォーカーを搬入、先行掘りして鋼矢板を圧入した。

3 自然科学分野の成果について

第1次-C調査で発見されたムシロは周辺の土壌ごと切り取り、保存処理され、現在、大阪府立泉北考古資料館で保管されている。最近の調査で発見された古墳時代後期のハシゴや弥生時代末期の木製穂積み具等は元興寺文化財研究所で保存処理されている。

弥生時代末期の土層をゆがめる形で地震の痕跡が広域に発見されている。報告された地点は遺跡北西部の第5次調査から遺跡南部の第6次調査・7次調査である。地震は基盤の

洪水粗砂層を液状化させ噴出させた液状化現象と小規模の正断層が連続して続き木杭等が折れているものである。弥生時代末期の遺跡では徳島県や淡路島等でもこのような痕跡がみられ、同時期に古南海大地震があったことを裏付ける資料と考えられている。

第5次調査と第6次調査で発見された各水田面の耕土については花粉分析とプラント・オパール分析を実施、報告されている。両分析により、各遺構面から稲科花粉と稲科植物のプラント・オパール化石が大量に発見され、水田が一時的なものでなかったことが確認されている。さらに第7次調査では珪藻分析が行われ水稲による水田耕作の裏付けもなされている。これらの成果の一部は日本文化財科学会でも発表された。

以上の成果を踏まえ、(財)大阪府文化財協会で行われた今回の調査では花粉分析と昆虫遺体の検出と同定を行った。花粉分析については近隣の田井中遺跡で行われた分析データと整合を目的とし、昆虫遺体の同定では稲作病害虫の発見を目的とした。これらの成果については現在検討中である。本報告ではそのうちの一部を付載として取り上げた。その他については改めて、報告の機会を予定している。

4 遺跡名について

志紀遺跡の範囲は府営八尾志紀住宅に限られた行政的なもので、その範囲の中で行われた八尾市文化財調査研究会の調査は田井中遺跡として報告されている。一方、田井中遺跡は八尾飛行場東半部からJR志紀駅方面に至る広域な範囲をもっており、その境界は明確でない。遺跡の範囲認識は八尾市教育委員会と大阪府教育委員会の間で食い違うという報告がある。報告では生産域を志紀遺跡、集落を田井中遺跡にという方向を示したが、その後、田井中遺跡でも水田が発見され、志紀遺跡でも集落の一部が発見され、条里区画は両遺跡に連続することから、さらに検討せざるをえない。

5 今回調査区の地区割りについて (第3図)

遺跡の位置標示については第VI座標を使用して、X、Yの座標で示した。遺物を取り上げる単位は4m四方の区画を設け区分した。表記方法は以下による。

大阪府八尾市志紀は本協会の区分で大G6-3に位置する1/2500地形図(都市計画図)中にある。この地図を12等分した500m方形区画を25等分した100m四方の地図が第3図である。100m方形区画を625等分した4m四方の区画は縦、横の順に2文字のアルファベットで表記し、区画の名称と定めた。本調査区は大G6-3E22~24に位置する。また、調査区は東西2カ所に分離している。便宜的に東側を東区、西側を西区と呼んでいる。

第三章 層 序

1 基本層序

今回の調査は、志紀遺跡において以前に確認された基本層序に沿ったかたちで層位を確認することができた。これまでの調査でも洪水層の厚薄、粗密の差はあるものの基本的に土層のまとまりを確認することができている。このことはその上面に展開する水田を中心とした遺構面が広域に、かつ同時期に存在することを示唆する証拠といえよう。しかし、志紀遺跡で確認されている基準層がどの時代に対応するのか確実にできる資料はまだ少なく、今回の調査でも今まで考えていた時期より新しい時代の遺物を含むことによって年代観を改定すべき層がいくつかあった。今後は近隣の田井中遺跡や老原遺跡との層の関連が究明でき、年代と遺構の拡がりが明らかにされることを期待したい。

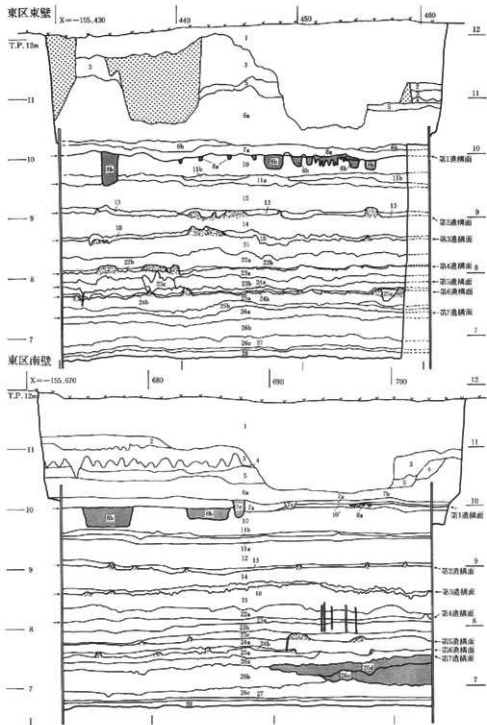
第0層（1） 府営住宅築造に伴う埋め立て土。客土による山土が主で50～100cm前後を測る。

第1層（2～6） 戦後から現代の耕土。第2次大戦時の焼土。並びに戦中、戦前の耕作土。埋め土直下には条里地割りに沿った現代の水田、畑の区画が良好に残る。

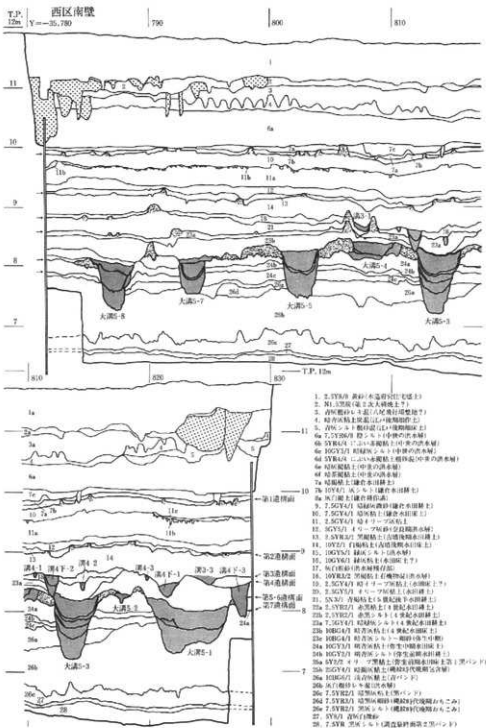
第2層（7～9） 青灰色、暗緑灰色の粘土質シルト、シルト質粘土。中世から江戸期の耕作土であり、条里地割りに沿う。従前の調査で断面観察などから4面以上の耕作面がとぎれとぎれ存在する。基本的に洪水層を改変した耕作面で遺物も多く含まれる。

第3層（10～11） 緑灰色系のシルト質粘土。志紀遺跡内では、部分的にこの面直下に平安時代のピット、井戸が検出される。本調査区では平安時代の遺構はなく、条里地割りに沿った水田を検出した。なお、本遺構面直上は部分的に粗砂（7a）で覆われ、第5次調査でも円礫を多量に含む洪水層が確認されている。今回の調査ではこの洪水層の上面から条里地割りに沿った水田を復元しようとした痕跡が認められ鎌倉時代中頃の土器も発見されている。従前の調査から4面程度が確認できる。

第4層（12） 灰色シルトでありラミナを形成する。志紀遺跡の全域で検出でき、粗砂、中砂、微砂、シルトで構成される厚い洪水層である。1mを超える層厚を測る場合がある。この層を挟んで上部は条里地割りに沿った現代～平安時代末の水田、畑等、下部は自然地形に沿った弥生時代前期～古墳時代後期の水田域となる。なお、飛鳥時代、奈良時代の遺



第4圖 東区土層圖 (高さ1/60・幅1/30)



第6図 西区土層図2 (高さ1/60・幅1/30)

物は認められるものの遺構としての土地改変はよくわからない。

第5 a層 (13~14) 茶褐色粘質土 (13)、緑灰色シルト質粘土 (14)。(13)層は耕作土、(14)層は床土(ベース)であり、本調査区では(13)層が(14)層で形成される畦畔を覆った状況が観察された。志紀遺跡では、この層で6世紀後半の水田域が広範囲で検出され、上層のシルトでバックされているため、残存状況も極めて良好である。なお、a層以外は4世紀~6世紀後半にかけて連続と水田経営を行うために、調査区ごとの対応関係を追うことは難しい。また、以前の調査では3世紀(庄内期)に対応する水田面と考えていた遺構面から、今回、4世紀(布留期)の土器を含む溝が見つかった。よって、本報告では床土を形成する洪水層の上層が庄内期に対応するとして報告した。今後の調査でこの遺構面が庄内期ではなく、布留期であることがより明確になることを期待したい。

第5 b層 (15~17) 緑灰色、暗緑灰色シルト質粘土。本層の上面は踏み荒らされており洪水砂(15)で覆われ、面が存在したと思われる。

第5 c層 (18~21) 緑灰色シルト質粘土。層間に挟まる有機物の混じる黒褐粘土層(18)は第3遺構面(5世紀後半)の耕作土となる。攪拌を受けた上層(20)と床土となる下層(21)からなる。

第5 d層 (22~23ab) 暗緑灰色シルト質粘土。層間に挟まる有機物の混じる赤黒褐粘土層(22b)は耕作土、(23)層は第4遺構面(布留期)の床土(ベース)となる。

第6層 (23c~24a) 緑灰色、暗緑灰色、灰色を呈するシルト質粘土。東区において、本層上面に粗砂がみられた。これまでの調査では本層から下層にかけて地震による正断層が認められている。

第7層 (24b~25) 黒色粘土層。上面は第6面の床土(ベース)となる。上部の攪拌を受けた耕土(24b)と、下部の攪拌の及ばない純粋な黒色粘土(25a)に分層できる。第5次調査等では弥生時代中期の小区画水田が検出された。

第8層 (26) 青灰色、緑灰色を呈する固く締まった粘土、シルト質粘土。本層から下で生痕化石が認められ、いずれも上層の黒色粘土が入る。本層は志紀遺跡では広域で見られるものの、大変薄い層で5cmに満たない。

第9層 (27~28) 黒色粘土帯。第7層の黒色粘土層よりやや褐色をおびる。一見、攪拌を受けた状態を呈する上層(27)と自然堆積のままの下層(28)に分層できる。上層には青灰色シルトが1~3mm程度のブロックとして入る。また、上層の直上から1~2cmの間は植物遺体が水平方向に倒れた状況を呈し、細かい単位の互層となる。この状況は調査区

の全域にわたって認められた。中河内地域一帯で確認できる縄紋時代晩期～弥生時代前期の黒色粘土帯に対応する。今回の調査では西側調査区において明瞭な遺構面が確認できなかったものの、東区では弥生前期の土器を含む小区西水田が明瞭に確認できた。弥生前期の可能性をもつ小区画水田はこれまでの調査区でも確認されてきたものの今回の調査区の水田は非常に企画的で床土を踏み締めた足跡の痕跡も明瞭に残されていた。志紀遺跡で水田経営が始まった時期を決定する層位として意義付けられる。なお、本層中には縄紋時代晩期の土器も散見されている。今回の調査でも確認できた。縄紋時代晩期の地表面を改変して弥生時代前期の水田経営が行われた可能性が強い。

第10層（29～） 縄紋時代晩期～弥生時代前期黒色粘土層より下層でありいずれも黒色、緑灰色の粘土、シルト質粘土で水平堆積を示す。これらの層は植物遺体を多く含む自然堆積である。各層の形成時期は不明である。第7次調査ではこの層中に自然流路を確認している。今回の調査でも同じ堆積物と起伏がみられた。しかし、遺物は含まれず堆積時期はわかっていない。

<註・文献>（第1表文献に対応）

- (1) 福田英人『志紀遺跡発掘調査概要』1986. 3 大阪府教育委員会
- (2) 成海佳子「田井中遺跡（第3次調査）」『昭和60年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告9 1986. 4 （財）八尾市文化財調査研究会
- (3) 成海佳子「田井中遺跡（第4次調査）」『昭和61年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告14 1987. 4 （財）八尾市文化財調査研究会
- (4) 成海佳子「田井中遺跡（第6次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報』昭和62年度（財）八尾市文化財調査研究会報告16 1988 （財）八尾市文化財調査研究会
- (5) 成海佳子「田井中遺跡（第8次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報』昭和63年度昭和63年度（財）八尾市文化財調査研究会報告25 1986 （財）八尾市文化財調査研究会
- (6) 福田英人「八尾市志紀遺跡の水田遺構」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第21回）資料』1990（財）大阪文化財センター
- (7) 西川寿勝郎『志紀遺跡発掘調査概要』Ⅱ 1992. 3 大阪府教育委員会
- (8) 吉田野乃「志紀遺跡（91-319）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告25 1992. 3 八尾市教育委員会
- (9) 成海佳子「田井中遺跡（第9次調査）」『平成4年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告 1993. 3 （財）八尾市文化財調査研究会
- (10) 中村清美編『志紀遺跡発掘調査概要』Ⅲ 1993. 3 大阪府教育委員会
- (11) 成海佳子「田井中遺跡（第10次調査）」『平成5年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告 1994. 3 （財）八尾市文化財調査研究会

第Ⅳ章 調査

1 第1遺構面（第8図）

a. 水田遺構（図版3 a・7 a b・10～17）

機械掘削の段階で、遺物を含む洪水粗砂層が現われた。人力掘削でこれらの土器片を含む包含層を除去し、その下の微砂層を取り除くと暗灰粘土の床土上に多数の足跡が並ぶ遺構面が見つかった。

第1遺構面は南北に続く大畦畔が西区で1条、小規模の南北畦畔が東区で3条、西区で11条、東西畦畔が西区で3条見つかり、条里制水田の一端を確認することができた。そのほか上層から切り込まれた多数の小溝群、それに牛馬耕の行われていたことを裏づける足跡、上層の粗砂層と床土を攪拌させる粘土取り穴等が発見された。各遺構の詳細は以下に示すとおりである。

南北大畦畔1-1は幅約1.3m、長さ約15m、調査区の西端で検出され、さらに南北へ延びると思われる。畦畔の上には灰白粗砂による洪水層が約3cm残っていた。この畦畔から東西畦畔1-1、東西畦畔1-2、東西畦畔1-3が分岐している。

南北畦畔はこの大畦畔を起点に10.9m間隔に並ぶ。（図版11.15～17）

南北畦畔1-1は長さ10.7m、幅0.5m、高さ0.1mを測る。畦畔はさらに北へと延びる。南側は後の耕起痕等で削平されている。（図版11 a）

南北畦畔1-2は長さ7.4m、幅0.65m、高さ0.1mを測る。畦畔はさらに北へと延びる。第6次調査の南北畦畔1-1に対応する位置にあり、繋がると思われる。南側は後の耕起痕等で削平されている。（図版11 b）

南北畦畔1-3は長さ8.6m、高さ0.2mを測る。畦畔はさらに北へと延びる。南側は後の耕起痕等で削平されている。畦畔の東側は、水路1-1によって削ってしまったため幅はわからない。第6次調査の南北畦畔1-2に対応する位置にあり、水路1-1とともに繋がると思われる。（図版12 a）

南北畦畔1-4は長さ17m、幅0.8m、高さ0.7mを測る。（図版17 b）

南北畦畔1-5は長さ17m、幅0.85m、高さ0.8mを測る。畦畔は更に南北に延びている。南北畦畔1-4と南北畦畔1-5は調査区の北端で連結する。（図版17 b）

南北畦畔1-6は長さ17m、幅0.5m、高さ0.3mを測る。畦畔は更に南北に延びている。



第7図 第1遺構面出土土器実測図(1/4)

条里地割りにのる南北畦畔1-5と南北畦畔1-7間を二分する位置にある。

南北畦畔1-7は長さ13m、幅0.5m、高さ0.7mを測る。(図版16b)

南北畦畔1-8は長さ13m、幅0.55m、高さ0.4mを測る。畦畔は更に南北に延びている。南北畦畔1-7と南北畦畔1-8は隣接しており連結する一連のものだろう。

南北畦畔1-9は長さ17m、幅0.7m、高さ0.5mを測る。畦畔は更に南北に延びている。(図版16b)

南北畦畔1-10は長さ3m、幅0.8m、高さ0.7mを測る。(図版16b)

南北畦畔1-11は長さ17m、幅0.85m、高さ0.8mを測る。畦畔は更に南北に延びている。南北畦畔1-9と南北畦畔1-10と南北畦畔1-11は調査区の南端で連結する。

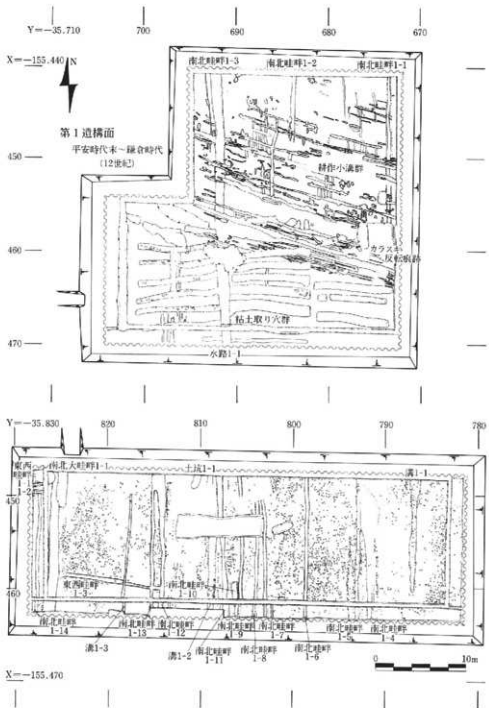
南北畦畔1-12は長さ14m、幅0.4m、高さ0.65mを測る。畦畔は更に南北に延びている。(図版16a)

南北畦畔1-13は長さ14m、幅0.5m、高さ0.4mを測る。畦畔は更に南北に延びている。南北畦畔1-12と南北畦畔1-13は調査区の北端で連結する。また、調査区の南端では東西畦畔1-3を介して南北大畦畔1-1と取りつく。(図版16a)

南北畦畔1-14は長さ15m、幅0.5m、高さ0.4mを測る。畦畔は更に南に延びる。南北大畦畔1-1と調査区の北端で東西畦畔1-2を介して取りつく。

東西畦畔1-1は長さ3m、幅0.5m、高さ0.4mを測る。畦畔は更に西に延びる。南北大畦畔1-1と調査区の北端で取りつく。同規模の東西畦畔1-2が近接する位置にある。

東西畦畔1-3は長さ12m、幅0.55m、高さ0.3mを測る。南北大畦畔1-1と南北畦畔1-13に取りつく。真東に対し約9°のふれをもつ。(図版16a)



第8図 第1遺構面全体図 (1/400)

b. そのほかの遺構（第8図）

第1遺構面上には畦畔や水田面を問わず多数の足跡群が検出されている。足跡は牛馬が歩行したと思われる楕円形のくぼみ、人間が歩行した時の足跡、唐鋤をひいたと思われる半月状の連続した痕跡がある。

唐鋤の痕跡は南北畦畔1-4と南北畦畔1-5間の水田面にみられる。それは南北畦畔1-4の東南側から弧を描く様に南北畦畔1-5に向かってひかれる。唐鋤の痕跡はみな半月状で深さ約7~15cm、幅は約15cm前後だった。（図版17b）

また、東区の中央では真東に対し約12°のふれをもつ鋤溝群が折り重なって発見された。多くは調査区内でUターンしており、耕起の実態が明瞭にわかる。東区南側では東西5m前後の細長い溝群が20以上発見された。いずれも埋め土は上層の洪水粗砂層で、掘り底には鋤で床土の粘土を起こした痕跡がある。これらは上層に溜った粗砂を耕上にするため、下層の粘土を混ぜて攪拌させるための粘土取り穴だと考える。洪水層は東区のほぼ全域を覆っているが、南側になるほど粒土が粗く北側ではシルト質だった。このことから北側は牛馬による唐鋤の耕起で南側は鋤で溝掘りして耕起、水田耕土をやり直したと考えられる。耕土中には鎌倉時代中期頃の瓦器塚や土師器皿が含まれ、平安時代末に遺構面が形成されて以来、小規模な洪水を克服し水田耕作を続けていたことがうかがえる。（図版12b・13）

水路1-1は南北畦畔1-3の東を南から北に流れる素掘り溝である。幅1.2m、長さ30.5m以上、更に調査区外へと南北に続く。第6次調査の水路1-1に対応する位置にあり、繋がると思われる。この溝は畦畔や遺構面の上面から切り込まれているものの出土土器の時期や埋め土からみて第1遺構面に関連する水路の可能性が高い。（図版12a）

耕作溝と考える東西小溝、南北小溝を多数確認している。南北小溝は長いもので13mをこえ調査区の南北に続く。短いもので約1m、幅はみな35cm前後である。埋土は上層の暗黄褐粘土によって覆われており遺物は無い。掘り底は船底形を示す。

c. 出土遺物（第7図 図版56）

第1遺構面にはほとんど遺物が残されていなかった。遺構面の直上を覆う粗砂層からは数片の瓦器と土師器が見つかった。遺構面直上からはこれまでの調査同様、古式の瓦器塚も見つかっており、条里地割りの形成は平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて行われたと考える。以後、小規模な洪水を克服しながら、小溝群や唐鋤の痕跡などが残され鎌倉時代中頃まで存続していたと考える。その後の土地利用の状況は上層の削平等によって明瞭でない。安定した遺構面の形成は大和川の付け替え以降になるのだろう。

2 第2遺構面（第10図）

a. 水田遺構（図版3b・7cd・18～24）

第1遺構面の基盤である暗灰粘土は土壌化がすすんだ土層であり、草根による侵食が30cm程度まで発達していた。その下には微砂やシルト質粘土が中心の、もろい湧水層が折り重なっていた。奈良時代の土器片や瓦が数点含まれていた。その下には粗砂層があり、古墳時代末期を中心とした遺物を含んでいた。粗砂層を除去する段階で第2遺構面の大畦畔が顔を出した。第2遺構面の直上は、植物遺体を含む黒褐色の薄い粘土層によって覆われる。その粘土層は小畦畔を覆っていたが大畦畔の最上部まで達していなかった。

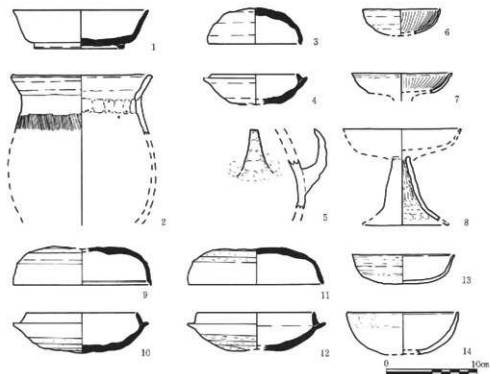
東区の第2遺構面からは、南東から北西にはしる2本の畦畔と、そこから網の目状に延びる小畦畔によって区切られた水田が見つかった。しかも遺構面全体には大人から子供までの人間の足跡が残されていた。（図版18）

南北畦畔2-1は、全長11m以上、幅約0.9m、真北に対して約10°西にふれる大畦畔である。遺構はさらに南北に調査区外へと続く。この南北畦畔2-1に直交するかたちで東側に1本、西側に3本の小畦畔が取りつく。南北畦畔2-1の西側でつながる3本の小畦畔は南北畦畔2-1に平行する1本の小畦畔とつながり13枚の小区画水田を形成する。南北畦畔2-1の東側には2枚の小区画水田がある。

南北畦畔2-2は、南北畦畔2-1の西に位置する大畦畔である。全長28.0m以上、幅約0.7m、真北に対して約20°のふれをもつ。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔2-2に直交するかたちで東側に4本、西側に4本の小畦畔が取りつく。西側で直交する4本の小畦畔は、南北畦畔2-2に平行する3本の小畦畔でそれぞれつながり、調査区内に11枚の小区画水田を形成している。合計、東区内に26枚の小区画水田が見つかった。（図版20b）

南北畦畔2-3は西区に位置する大畦畔である。全長13.5m以上、幅約0.75m、ほぼ南北の軸にのる。さらに遺構は南北に調査区外へと続く。この南北畦畔2-3に直交するかたちで東側に3本、西側に1本の小畦畔が取りつく。西区内に23枚の小区画水田が見つかった。

小区画水田の全容がほぼ復元できたのは49枚で長軸、短軸、面積は第2表に示すとおりである。西区の水田遺構は床土の起伏によって畦畔を複雑に調整している。これらは水田の区画を目的にしたものより、保水を確実にするための試行錯誤と考える。また、床土の高い部分は鎌によって耕起された痕跡が密に残されていた。（図版24）



第9図 第2遺構面上層洪水層出土土器（1～8）
第2遺構面出土土器実測図（9～14）（1/4）

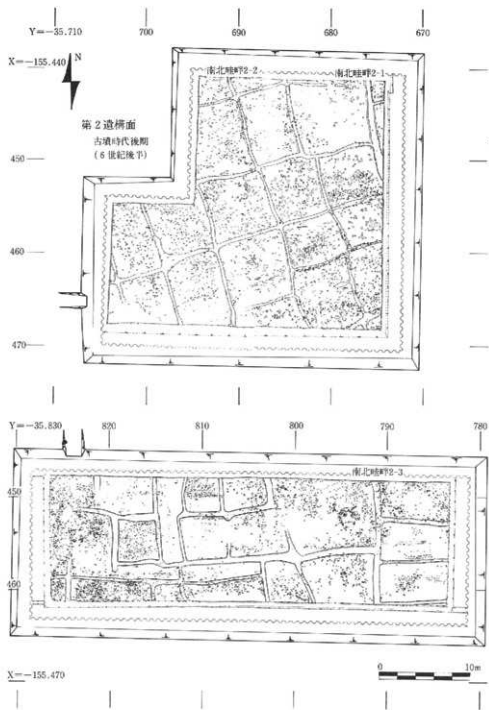
b. 出土遺物（第9図9～14 図版58）

遺構面直上から出土した遺物は土器に限られる。第9図11は須恵器坏蓋で完形で出土した。外面中央に焼成後に朱が塗られていた。このような印をした須恵器は第6次調査でも数点発見されており、第6次調査で発見された記号と形が違うことから所有者を識別するためのものと推定できる。焼成後に朱を塗布して記号を付けた須恵器は柏原市大泉遺跡や四条畷市讃良郡条里遺跡等でも確認されているが一般的でない。第9図13・14は小形の上器器地であまりまでの調査でもたびたび発見されている。暗紋はない。

第2遺構面は出土した遺物より6世紀後半に位置付けられる。

c. 第2遺構面上層出土土器（第9図1～8 図版57）

第2遺構面上層の洪水層中から発見された遺物は奈良時代から飛鳥時代のものが混在している。これらの遺物が洪水に伴うものか、かつてあった同時代の遺構面を削平したのか判然としない。付近の調査で奈良時代の遺構が散在することも知られている。今回の調



第10圖 第2遺構面全体圖 (1/400)

査でも奈良時代のものと思われる平瓦の破片が数点発見されている。また、これまでの調査で奈良時代末期の遺物も洪水層中より確認されている。

第9図1・2は奈良時代前半の土器である。1はほぼ完形であるが使いこまれたために摩滅が激しい。2は胴部内面に煤が付着している。また、煤とともに炭化飯が5粒付着していた。

第9図3～8は飛鳥時代の土器である。いずれも小片である。3は西区から出土した坏蓋である。焼成は甘く灰白色、天井部は無調整である。4は坏身、やはり焼成は甘く灰白色、底部は無調整である。6・7・8は土師器の坏身と高坏である。丁寧な暗紋が施されている。胎土は緻密で赤褐色、焼成も良い。



写真1 第2遺構面出土土器

3 第3遺構面（第11図）

a. 水田遺構（図版4 a・25～30）

第2遺構面の基盤である緑灰色粘土の下にはいくつかの面がとぎれがちに続いていた。足跡の痕跡が残る面もあったが調査区全体には拡がらず割愛した。その下には微砂やシルト質粘土が中心のもろい湧水層が折り重なっていた。その下には薄い粗砂層があり、粗砂層の下面には土壌化が発達した粘土層がある。粘土層は複雑な堆積の結果形成された様だが、草根による侵食や水田に伴うローリングで層界を明快にはできなかった。大畦畔の基底部から延びる小畦畔の痕跡を頼りに第3遺構面を検出した。これまでの調査とはほぼ同じ要領である。東区では足跡や小畦畔まで検出できたが、西区は土壌化が進み、小畦畔や足跡は明快にはできなかった。また、西区の西半部は臥臥状に水路を改変した跡があり、遺物は散在するものの明瞭な水路の形態を検出できなかった。（図版30）

第3遺構面からは、南東から北西にはしる3本の大畦畔と、そこから網の目状に延びる小畦畔によって区切られた水田が見つかった。

南北畦畔3-1は東区で発見された全長12m以上、幅約0.8m、真北に対して約10°西にふれる畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔3-1に直交するかたちで東側に1本、西側に2本の小畦畔が取りつく。西側で直交する2本の小畦畔は、南北畦畔3-1に平行する小畦畔でそれぞれがつながり、調査区内に9枚の小区画水田を形成している。盛土中から土師器壺が発見された。（図版27b）

南北畦畔3-2は南北畦畔3-1の西に位置する。全長29m以上、幅約0.5m、真北に対して約25°のふれをもつ。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔3-2に直交するかたちで西に4本の小畦畔が取りつく。東側で直交する5本の小畦畔は、南北畦畔3-2に平行する小畦畔に取りつく。南北畦畔3-2に西側でつながる小畦畔は南北畦畔3-2に平行する3本の小畦畔と連結し14枚の小区画水田を形成する。

南北畦畔3-3は西区の東辺に位置する大畦畔である。全長14m以上、幅約1.25m、南北の軸に対して約16°のふれをもつ。遺構は南北に調査区外へと続く。南北畦畔3-3に取りつく小畦畔は東側に2本あるが、土壌化が進み方向や長さは明快でない。盛土中から須恵器高坏蓋が発見された。（図版29b）

小区画水田は第2遺構面同様、連綿と拡がりを持ち、東区内だけでも23枚の水田があったと予想できる。そのうち小区画水田の全容がほぼ復元できたのは8枚だった。長軸、短軸、面積は第2表（P60）に示すとおりである。

b. その他の遺構

西区の西半部で堤をもつ水路状の遺構が3カ所発見されている。これらが同時に存在するか明確でない。しかも土壌化が進み平面的に検出することが難しかった。

畝畝3-1は西区の南側断面に堤状の盛土に挟まれた粘土の堆積がみられ、平面的に確認したものである。全長5m、溝の幅1.8m、深さ0.4mに及ぶ。真北に対し約15°のふれをもつ。

畝畝3-2は畝畝3-1の西側に溝状の粘土堆積がみられ、平面的に確認したものである。北側断面で堤状の盛土痕跡もあった。全長11m、溝の幅1.2m、深さ0.2mに及ぶ。遺物はなく、存続期間も長くはなさそうである。真北に対し約65°のふれをもつ。

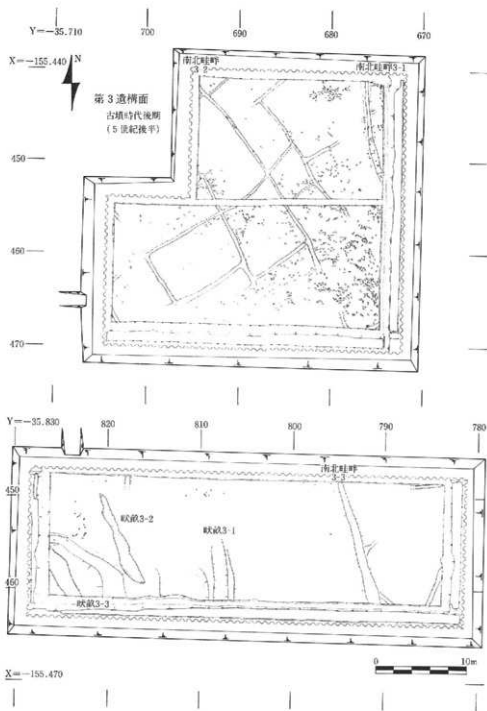
畝畝3-3は西区の南側断面に堤状の盛土に挟まれた砂利の堆積がみられ平面的に確認したものである。全長5m、溝の幅1.8m、深さ0.4mに及ぶ。須恵器と土師器の小片が発見されている。真北に対し約60°のふれをもつ。(図版30)

c. 出土木器(第12図 図版67・68)

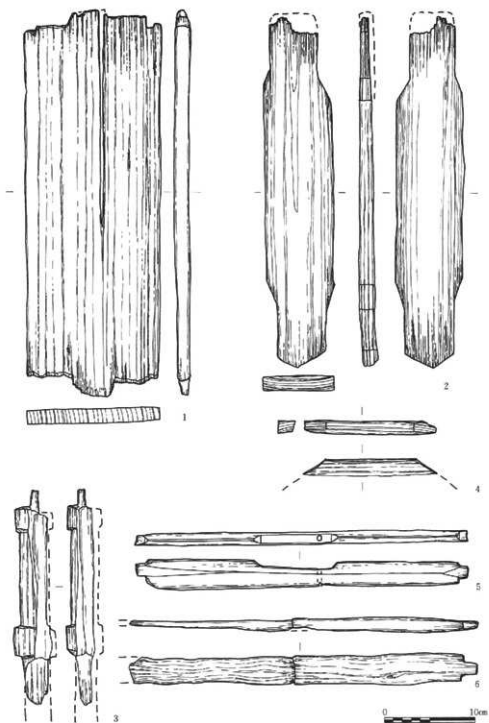
第3遺構面上面から大足の部位と思われる木片が散在して発見されている。第12図1は長辺42.4cm、幅10.8cmを測る板材である。両端に突起状のほぞをもつ。2も両端に突起状のほぞをもつ板材である。先端を欠損しており、残存長38.2cm、幅7.7cmを測る。しかし、1・2ともに鼻緒を通す穴等、足を固定する痕跡はみられない。4は台形の板材で下半部を欠損する。残存長14.4cmを測る。5は両端にほぞをつくりだし、中央の片側に凹部をもつ。長辺36cm、幅3.2cmを測る。凹部に穿孔があるものの中心よりずれる。6も5と形態は同じである。作りは粗く一方の端を欠損する。残存長37.4cm、幅3.2cmを測る。これまでの調査でも4・5・6同様の部位が発見されている。3は両端を欠損する握り手状の木製品である。剝離が著しく全形を復元することはできない。上下に幅広の突帯を作り出す。

d. 出土土器(第13図 図版58)

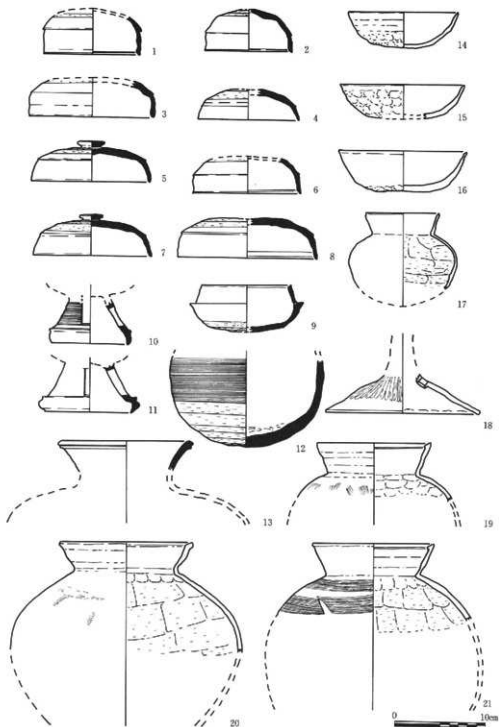
1~8は須恵器杯蓋である。いずれも直立して立ち上がり、口縁端部内面に明瞭な段をもつ。天井部はやや丸みを帯び、立ち上がりとの境を界する稜線はやや鋭さに欠ける。回転ヘラ削りは天井部の半分前後まで及んでいる。5・7は高杯蓋で天井扁平な宝珠つまみをもつ。9は須恵器杯身で口径9.8cmを測る。口縁端部内面に段を施し、底部は丸みをもつ。10・11は有蓋高杯の脚部である。脚端部は内傾するものの鋭く立ち上がり、10は横方向にカキ目を施した後、長方形の透かし穴をもつ。いずれも小片からの復元である。12は短頸壺の体部で器壁が厚く、焼きは甘い。外面は乳灰白色である。底部は粗く削られ、胴



第11圖 第3遺構面全体図 (1/400)



第12图 第3 遺構面出土木器実測図 (1/4)



第13图 第3遺構面出土土器実測図(1/4)

部に細かいカキ目を横方向に施す。13は甕の口縁部である。口径は14.4cm、緩やかに外反し端部を下方に折り曲げ段を作り出す。

14～16は土師器甕である。口縁端部を丸くつまみだし、外面に指頭の圧痕を明瞭に残している。14は口径11.8cm、高さ4.1cmを測る。17は小形の土師器壺である。外面は摩滅が激しく、内面は粗い削りの痕跡をとどめる程度である。19～21は土師器甕である。いずれも、外面のハケ目は煤が付着して明瞭でない。内面は粗い削りが施されており、薄い器壁を作り出している。口縁端部を内側に折り曲げる。19は口径12.4cm、20は口径14.5cmを測る。いずれも小片からの復元である。



写真2 第3遺構面出土土器

4 第4遺構面（第15図）

a. 水田遺構（図版4 b・31～36）

第3遺構面の基盤になる青褐粘土を除去すると薄い炭化物が混じる淡茶灰粘土が見つかった。この粘土層を薄くはがしてゆくと、第4遺構面の小畦畔の高まりがみえた。小畦畔は大畦畔から派生しており、第3遺構面の大畦畔とはほぼ同じ位置から第4遺構面の大畦畔が発見されている。

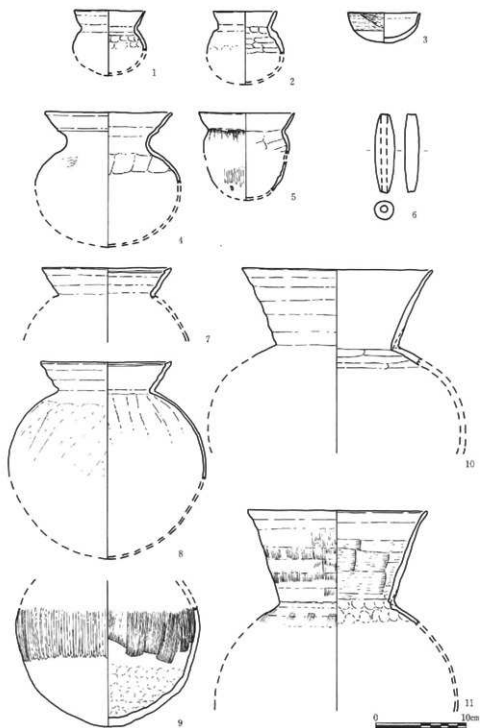
南北畦畔4-1は、全長6m以上、幅約1m、真北に対して約27°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔4-1に直交するかたちで東西に1本ずつ小畦畔が取りつく。

南北畦畔4-2は、全長12m以上、幅約1.2m、真北に対して約30°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔4-2に直交するかたちで東に1本小畦畔が取りつき、南北畦畔4-1と繋がる。西側で直交する小畦畔は発見されなかった。

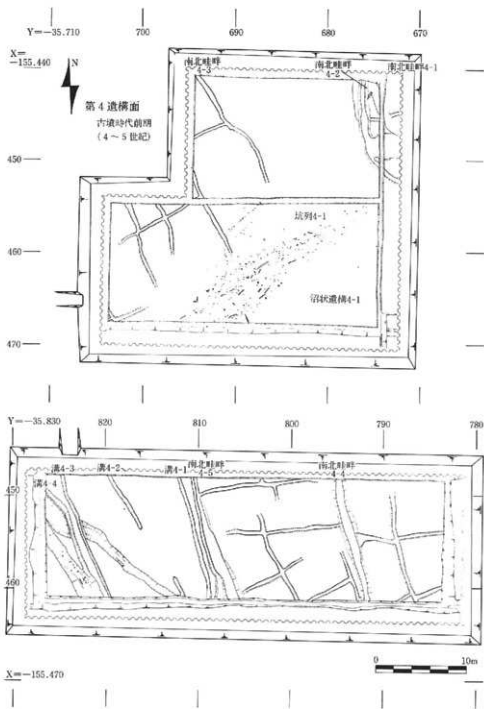
南北畦畔4-3は、全長13m以上、幅約0.5m、真北に対して約50°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔4-3に直交するかたちで西に1本の小畦畔が取りつく。南北畦畔4-3の西に12枚の小区画水田を形成している。

小区画水田は南側でとぎれ、450本をこえる大量の杭が東北から南西にかけて打ち込まれていた。杭は南北畦畔4-3の南端から南西に小畦畔を補強するように打ち込まれた部分もあった。杭列の南東は緩やかに下る黒褐色粘土が堆積し沼状遺構を形成していた。沼状遺構からは土鍾も発見されており、小魚を漁猟した様子がうかがえる。杭列の上面は土盛した状況等特別な構築物は検出できなかった。また、一部の杭の上面はこの面で倒れ込んでいた。杭は自然木を鉛筆状に尖らせただけのものがほとんどで、一部は建築部材や廃材を転用したものもみられた。以前の調査でも大畦畔の芯材として建築廃材や梯子等が転用されており、同質のものと考えられる。

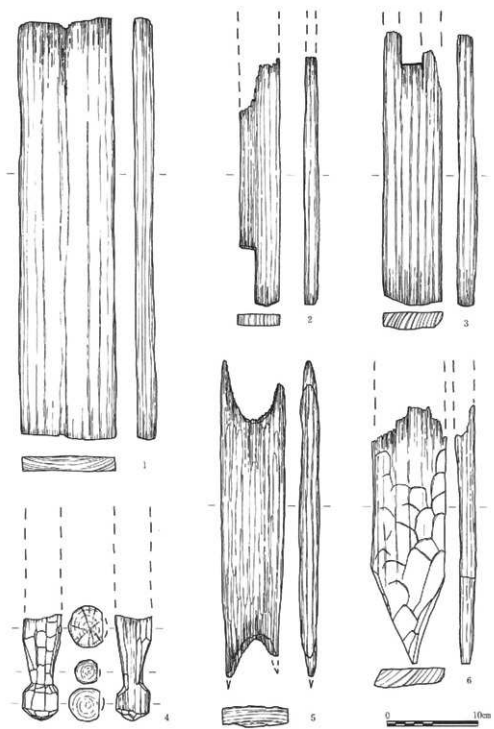
南北畦畔4-4は全長13.5m以上、幅約1.7m、真北に対して約15°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔4-4に直交するかたちで西側に2本の小畦畔が取りつく。西側で直交する2本の小畦畔は、南北畦畔4-4に平行する1本の小畦畔で、東側で直交する2本の小畦畔は、南北畦畔4-4に平行する1本の小畦畔でそれぞれが繋がり、調査区内に15枚の小区画水田を形成している。（図版35 b）



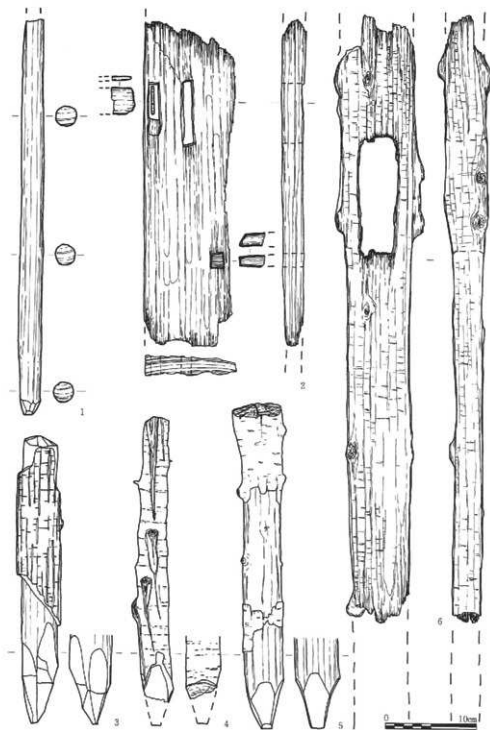
第14図 第4遺構面・第4遺構面直下の溝出土土器実測図(1/4)



第15圖 第4遺構面全体圖 (1/400)



第16图 第4遺構面出土木器実測図1 (1/4)



第17图 第4遺構面出土木器実測図2 (1/4)

南北畦畔4-5は全長13.5m以上、幅約1m、真北に対して約15°西にふれる大畦畔である。遺構は更に南北に調査区外へと続く。この南北畦畔4-5に直交するかたちで東側に3本の小畦畔が取りつく。(図版36a)

小区画水田は第2、第3遺構面同様、連続と拮りをもち、調査区内だけでも34枚の水田があったと予想できる。そのうち小区画水田の全容がほぼ復元できたのは12枚だった。長軸、短軸、面積は第2表(P60)に示すとおりである。

b. その他の遺構

西区の西端で4条の溝が発見されている。

溝4-1は南北畦畔4-5の西に隣接して延びる全長13.5m以上、幅0.5m、深さ5cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。

溝4-2は全長13.5m以上、幅0.5m、深さ5cmの素掘り溝である。溝は途中で途切れるものの埋め土は同じことから一連のものだと判断した。真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。

溝4-3は全長13.5m以上、幅0.35m、深さ5cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。

溝4-4は溝4-3の西に隣接して延びる全長13.5m以上、幅0.35m、深さ5cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約15°西にふれ、さらに南北へと続く。

c. 出土木器(第16・17図)

東区から450本をこえる大量の杭列が発見された。ほとんどの杭は自然木の先端を簡単に加工したもので樹種はサクラ、クスギ、カシがあった。全ての杭についての樹種の確認と保存はしていない(第17図3~5)。17図4は伐採以前に小枝がカットされ、カット面がこぶ状に変形している。杭の上半部は折れて横倒しになったものもあった。検出された杭は全長が40cm前後だが、本来はさらに長かったと考えられる。杭の中には板材などを転用したものもあった。第16図2・3は削りのある部材を転用している。5は上下を焼いて切り取ってある。6は板材をV字形にカットして杭としている。4は棒状の材に段を付け端部を丸く作り出している。このような端部をもつ木器は鳥形木製品が有名だが、今回は杭列から出土しており元来の用途は不明である。第17図1は棒形で滑らかに面取りされ、端部を鉛筆状に削りだす。2は3カ所のはぞ穴をもつ板材ではぞ穴には板の皮で固定された薄い板材の断片や四角い断片が刺さったまま出土した。

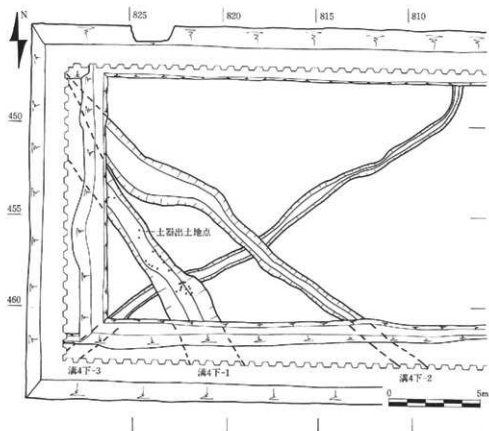
5 第4遺構面直下の遺構（第18図）

西区の第4遺構面には遺構の切り合いがあった。発見された遺構は3条の溝である。第4遺構面が形成される直前であるが出土遺物から時間的な差はみられない。

溝4下-1は全長8.5m以上、幅1.4m、深さ22cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約40°西にふれ、さらに南北へと続く。溝の中には土器片が散在していた。

溝4下-2は全長17m以上、幅1.35m、深さ35cmの素掘り溝である。溝は途中で途切れるものの埋め土は同じことから一連のものとして判断した。真北に対して約52°西にふれ、さらに南北へと続く。この溝は調査区西端で溝4下-1に切られる。

溝4下-3は全長26.5m以上、幅0.7m、深さ10cmの素掘り溝である。溝は真北に対して約30°東にふれ、さらに南北へと続く。この溝は溝4下-1と溝4下-2に直交した形で切られている。



第18図 第4遺構面直下の遺構図（1/200）

b. 第4遺構面および第4遺構面直下の遺構出土遺物（第14図）

出土遺物は少ない。南北畦畔4-2盛土から第14図5・6・9・11の土師器が見つっている。5は底部外面にもみ殻の圧痕が残り肩から胴部にかけては粗いハケ目調整を施す。9は壺形土器の下半部で底部は丸く、厚く作り出す。11は大型の壺である。内面に粗い横ハケ、外面に粗い縦ハケの痕跡が残る。頸部に煤が付着していた。6は東区の沼状遺構から出土した土鍾で長辺8.6cmを測る。

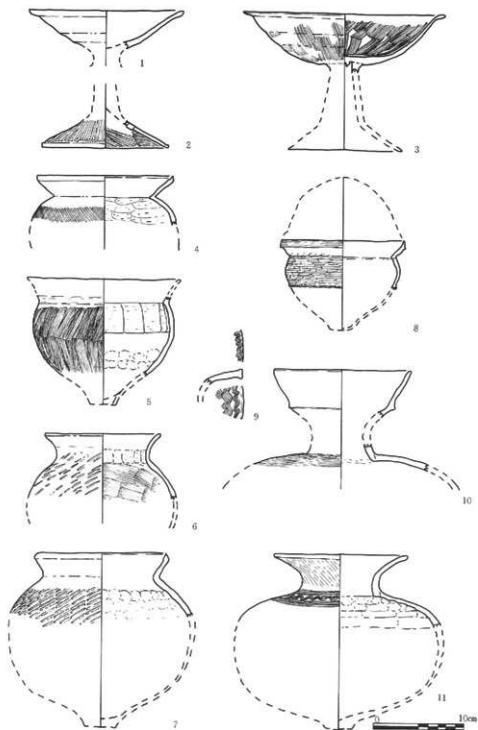
第4遺構面直下の溝4下-1から第14図1・4・7・8・10が出土した（写真3）。1は小型壺で指押さえの痕跡を明瞭に残す。胎土は中河内の土器に通常みられる角閃石や雲母片、石英粒を大量に含む。4は中型壺で外面が赤く焼け、口縁部まで煤が付着する。口縁端部は丸く作りだし、二重口縁は強く外反、指ナデされた頸部をもつ。7・8は壺形土器の口縁部である。いずれも小片である。外面に煤が付着する。10は大型の長頸壺である。胴部内面まで細かく削り出し、頸部は丁寧にナデ仕上げされている。

c. 第5遺構面上層洪水層出土遺物（第19図）

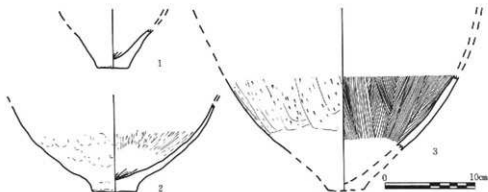
第4遺構面の基盤になる暗青灰シルトを除去すると調査区の西側ほど粗い淡褐砂の洪水



写真3 第4遺構面直下の溝4下-1土器発見状況



第19圖 第5遺構面上層洪水層出土土器実測圖1 (1/4)



第20図 第5遺構面上層洪水層出土土器実測図2 (1/4)

層が堆積していた。この洪水層は発達した部分では1mを超え、上下2層に分層できる部分もある。しかし、堆積の違いが洪水の起源の違いによるものか、どれだけの時期差があるのか判然としない。第4遺構面の基盤層は強く土壌化しているがこの洪水層の最上層になると考えられる。以前の調査で第4遺構面から弥生時代末期の土器が出土した。ところが、今回の調査でこの洪水層に弥生時代末から弥生時代後期の土器が含まれていることがわかり、第4遺構面出土土器も基盤の層に入っていた古い土器が巻き上がっていたと考えざるをえなくなった。また、第4遺構面直下の遺構から布留期の土器が出土していることから第4遺構面は古墳時代前期かそれ以降、下層の洪水層が弥生時代後期から末期のいずれかと結論づけられた。

第19図1～3は高坏形土器で内面に粗いハケ目の痕跡がみられる。4は庄内式土器で器壁が薄く、焼きがよい。生駒西麓産の胎土の特徴を示す。5～7は粗いタタキ目を残す甕形土器である。底部は残っていないが平底になると予想する。また、平底の小片も見つかっている。9～11は壺形土器である。9・11は加飾を伴う。

第20図1～3は全て東区から出土している。1・2は壺形土器の底部で外面を丁寧にナデ仕上げ、内面に蜘蛛の巣状のヘラ削り痕跡があり、弥生時代後期の特徴を示す。3は外面をヘラ削りし、内面にも粗いハケ目を残す。器壁は厚く、外面は赤褐色、内面は黒茶褐色を示す。

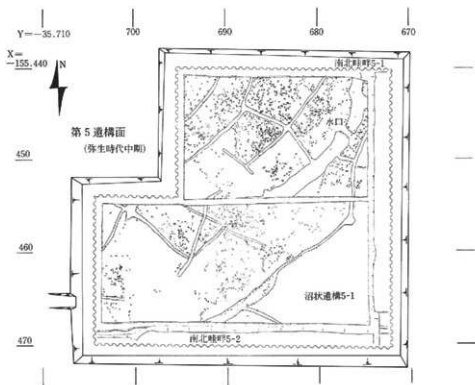
5 第5遺構面（第21～26図）

a. 水田遺構（図版37・38）

第4遺構面下層の洪水粗砂層を除去すると、東区では弥生時代中期の土器を含む大畦畔が現われ水田遺構の拡がりが確認できた。

南北畦畔5-1は南北5.7m以上、幅1.5m、高さ10cmで、真北に対し約42°のふれをもつ。遺構はさらに北へと延び、南側は先細りとなつてとぎれる。調査区の北隅に水口をあけ、水口の両端は木杭を打って補強する。この南北畦畔5-1に直交する形で東に2本の小畦畔が、西に4本以上の小畦畔が取りつく。調査区内には南北畦畔5-1に平行する小畦畔が3条みられ、合計14面以上の小区画水田が形成されていた。

南北畦畔5-2は南北畦畔5-1のすぐ東に平行して延びる。南北28m、幅0.5m、高さ10cmを測る。南北畦畔5-2はさらに南北へと延び南側ほど発達している。南側部分では畦畔を補強するため木杭が等間隔に打ち込まれていた。この大畦畔の東側は小畦畔や足跡遺構がとぎれ、沼状の落ち込みとなる。（沼状遺構5-1）



第21図 東区 第5遺構面全体図（1/400）

b. 大溝群 (図版39～50)

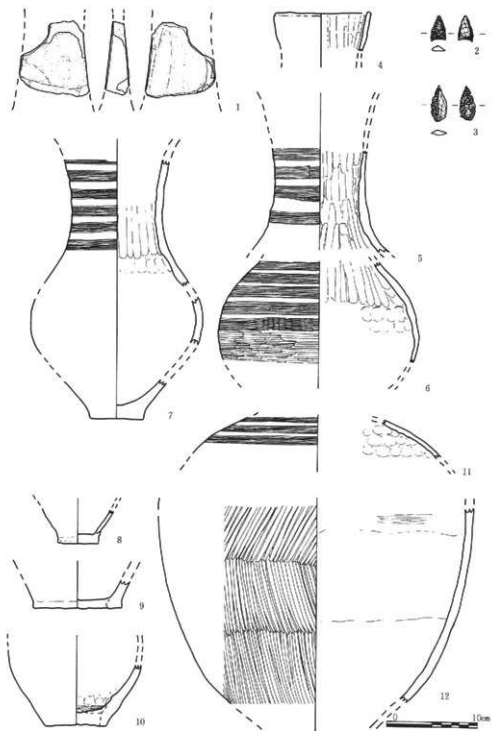
第4遺構面の基盤になる暗青灰シルトの下層には西区では淡褐粗砂が1m以上堆積していた。この洪水層は上下2層に分層できる部分もあるが時期差を確認することはできなかった。洪水層を除去すると起伏にとんだ第5遺構面が現われた。

大溝5-1は長さ9m以上、幅3.65m、深さ0.8mを測る斜行溝である。埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。下層の上面には薄い青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示すものとおもわれる。溝底より弥生時代中期前半の土器片が発見されている。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。大溝5-1の西岸は連結溝5-1が直行する形で取りつく。埋め土は乳白粗砂のラミナによる。

大溝5-2は長さ10.9m以上、幅1.05m、深さ0.2mを測る浅い溝である。大溝は土橋5-1によって分断される。土橋付近の埋め土は堤5-3の盛土と攪拌されており、土橋の付け根から大溝5-3へ排水していたことがわかる。埋め土は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。

大溝5-3は長さ12.7m以上、幅4.5m、深さ1.3mを測る斜行溝である。埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。ブロック土の層は大きく3つに分けられ、それぞれの上面に薄い青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示すものとおもわれる。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナが厚く堆積し、埋没していた。これらの層とは別に掘り方の縁にはところどころ古い堆積層が残っている。堆積層は青灰シルトと黒褐粘土で、層の重なりは明瞭でない。堤の土が落ち込んだものだろう。これを一度掘り直した後に上記した堆積があったものとおもわれる。土橋5-1が取りつく東に柱痕跡を残す木橋の痕跡が発見されている。

大溝5-4は南に長さ14m以上、幅1.7m、深さ0.2mを測る浅い溝と、北に長さ3m以上、幅2.95m、深さ0.95mを測る斜行溝による。大溝は土橋5-2によって分断され、南の大溝は北の大溝の西に水路を作って水を引き込む。すなわち連結溝5-2は堤5-4上にあり、北から南に傾く傾斜をもつ。両溝の埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。下層の上面には薄い青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示しているとおもわれる。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。



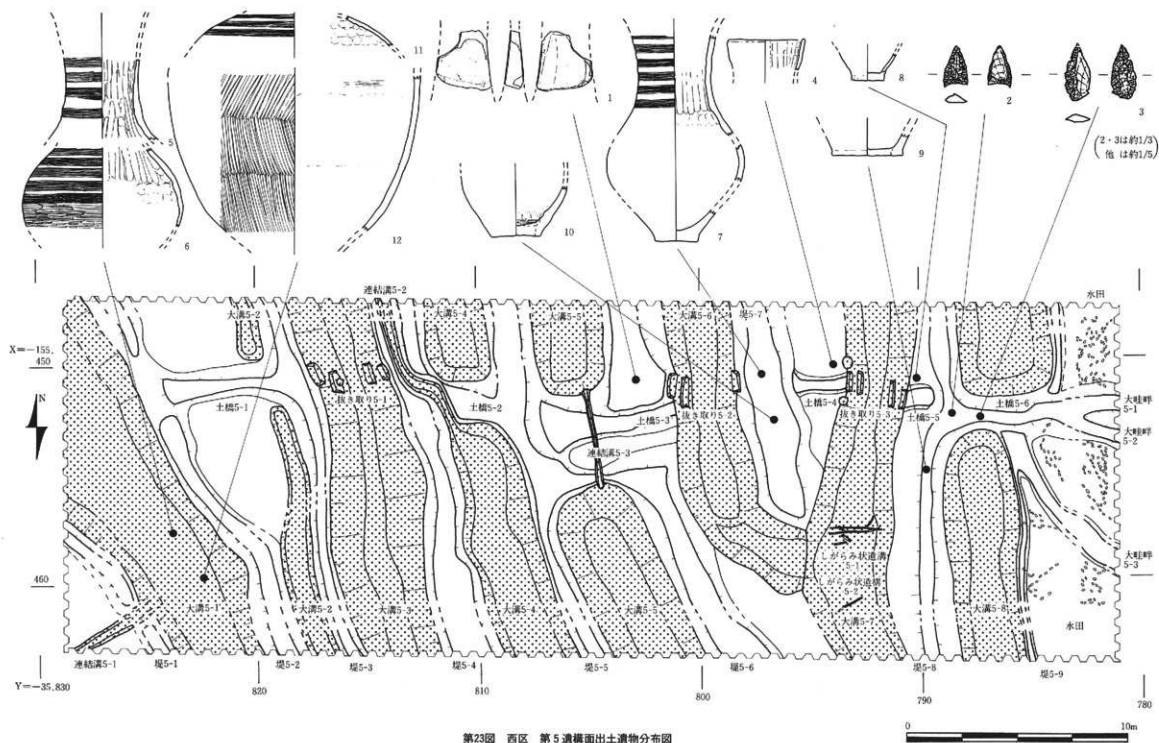
第22图 西区 第5道横面出土土器实测图 (1/4)

大溝5-5は北に長さ4m以上、幅3.1m、深さ1.08mを測る斜行溝と、南に長さ5.9m以上幅4m、深さ0.9mを測る斜行溝による。大溝は土橋5-3によって分断され、南の大溝は北の大溝との間に水路を作って水を送り出す。すなわち連結溝5-3は長さ4.55m、深さ0.2mで南から北に傾く傾斜をもつ。両溝の埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。下層の上面には薄い青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示すものとおもわれる。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。

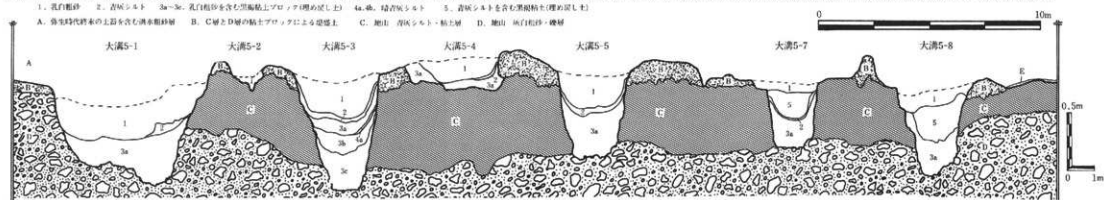
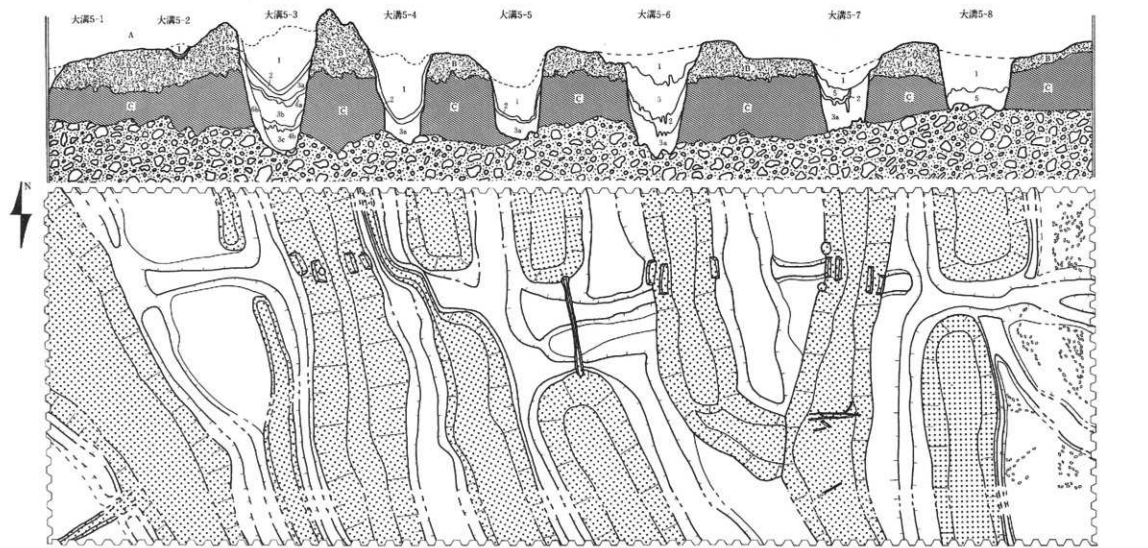
大溝5-6は長さ12.4m以上、幅3m、深さ0.79mを測る斜行溝による。大溝5-6は大溝5-7から南で分岐したもので、南から北に傾く傾斜をもつ。埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示している。下層の上面には青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示すものとおもわれる。中層は堤の盛土とほぼ同じ青灰シルトを含む黒褐粘土のブロック土によって埋め戻されている。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。土橋5-3が取りつく東に柱抜き取り跡を残す木橋の痕跡が発見された。

大溝5-7は南に長さ12.8m以上、幅3.25m、深さ0.95mを測る。埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。下層の上面には青灰シルトのラミナ層をもつ。これは滞水した後に干上がったことを示すものとおもわれる。中層は堤の盛土とほぼ同じ青灰シルトを含む黒褐粘土のブロック土によって埋め戻されている。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。土橋5-4が取りつく東に柱抜き取り跡を残す木橋の痕跡が発見されている。また、大溝5-6と連結する北側と南側に木組みのしがらみ状遺構が残る。

大溝5-8は南に長さ8.1m以上、幅3.4m、深さ0.73mを測る大溝と、北に長さ2.5m以上幅4.1m、深さ0.59mを測る大溝による。大溝は土橋5-6によって分断される。南側の大溝の埋め土の下層は大溝5-6・大溝5-7の中層にみられた堤の盛土とほぼ同じ青灰シルトを含む黒褐粘土のブロック土によって埋め戻されている。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。しかし、北側の大溝の埋め土の下層は地山の灰白粗砂と炭化物を大量に含む黒褐粘土で、人為的に埋め戻されたブロック土の様相を示す。中層は南側の大溝下層にみられた青灰シルトを含む黒褐粘土のブロック土によって埋め戻される。これらの堆積状況をみるかぎり、下層と中層の埋め戻し時期に大差はないと考える。上層は幾重にも折り重なった乳白粗砂のラミナによって埋没していた。



第23图 西区 第5遺横面出土遺物分布图



第24図 西区 第5遺構面大溝群土層図

堤5-1は調査区の西端に位置する。灰白粗砂の地山に0.62mの盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土、灰白粗砂がブロックになったもので、遺物は確認できなかった。堤を分断する形で連結溝5-1が横切る。

堤5-2は大溝5-1の東に位置する。長さ14.7m以上、幅約1.5mを測り、灰白粗砂の地山に7cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土、灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-1を掘削した土であろう。土橋5-1が東に連結する。

堤5-3は大溝5-2の東に位置する。長さ13m以上、幅約1.5mを測り、青灰粘土の地山に30cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土、灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-3を掘削した土であろう。土橋5-1が西に連結する。土橋付近の盛土は大溝5-2の埋め土と攪拌されており、土橋の付け根から大溝5-2の水を大溝5-3へ排水していたことがわかる。

堤5-4は大溝5-3の東に位置する。長さ12.5m以上、幅約1.9mを測り、青灰粘土の地山に20cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土と灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-3・大溝5-4を掘削した土であろう。堤上を連結溝5-2が北から南に流れ、土橋5-2が東に連結する。

堤5-5は大溝5-4の東に位置する。長さ13m以上、幅約2.4mを測り、青灰粘土の地山に40cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土、灰白粗砂がブロック土になったもので、大溝5-4・大溝5-5を掘削した土であろう。堤は土橋5-2が西に、土橋5-3が東に連結する。

堤5-6は大溝5-5の東に位置する。長さ14m以上、幅約3.1mを測り、青灰粘土の地山に20cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土、灰白粗砂がブロック土になったもので、大溝5-5・大溝5-6を掘削した際の土であろう。堤はさらに盛り上げられ、土橋5-3が西に連結する。堤上より砂岩製の砥石が発見されている。

堤5-7は大溝5-6の東に位置する。長さ9.6m以上、幅約3mを測り、青灰粘土の地山に30cm程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土と灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-6・大溝5-7を掘削した土であろう。堤は土橋5-4が東に連結する。堤の南は大溝が連結することによってとぎれる。堤上から弥生時代中期の壺形土器が発見されている。

堤5-8は大溝5-7の東に位置する。長さ12.75m以上、幅約2.35m、青灰粘土の地山に30ca程度の盛土をもつ。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土と灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-7・大溝5-8を掘削した土であろう。堤は土橋5-5が西に土橋5-6が東に連結する。堤上から壺形土器の底部等が発見されている。

堤5-9は大溝5-8の東に位置する。土橋5-6によって南北に分断されている。また、東側に水田があり、大畦畔の機能を兼ねているとおもわれる。北側は長さ2.7m以上、幅約0.4m、青灰粘土の地山に5ca程度の盛土をもつ。南側は長さ8m以上、幅約0.4m、青灰粘土の地山に5ca程度の盛土をもつ。東に長さ7.2m以上、幅約0.4mの大畦畔が南東に55°のふれをもって分岐する。それぞれの盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土と灰白粗砂がブロックになったもので、大溝5-8を掘削した土であろう。

土橋5-1は堤5-2と堤5-3を連結する道状遺構である。長さ6.5m、幅約1.5mを測る。大溝5-2を分断する形で地山を掘り残し、盛土を盛って形成される。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土と灰白粗砂がブロックになったもので地山から30ca程度を測る。

土橋5-2は堤5-5と連結する道状の遺構である。長さ2.5m、幅約1.9mを測る。大溝5-4を分断する形で地山を掘り残し、盛土を盛って形成される。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土がブロックになったもので地山から30ca程度を測る。連結溝5-2によって堤5-4と分断される。

土橋5-3は堤5-5と堤5-6を連結する道状遺構である。長さ6.8m、幅約1.25mを測る。大溝5-5を分断する形で地山を掘り残し、盛土を盛って形成される。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土がブロックになったもので地山から30ca程度を測る。連結溝5-3によって分断される。

土橋5-4は堤5-7の東に連結する道状遺構である。長さ2.5m、幅約0.7mを測る。大溝5-7の西をテラス状に掘り残し、盛土を盛って形成される。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土がブロックになったもので地山から30ca程度を測る。付近より壺形土器の口縁部破片が発見されている。

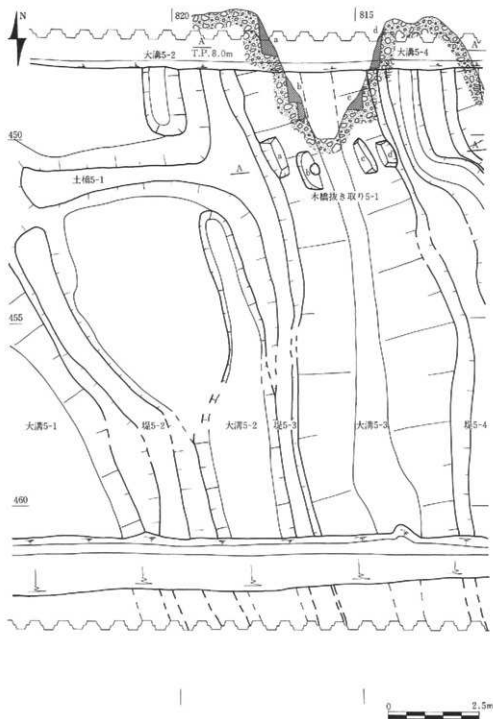
土橋5-5は堤5-8の西に連結する道状遺構である。長さ1.45m、幅約1.1mを測る。大溝5-7の東をテラス状に掘り残し、盛土をもって形成される。盛土は炭化物を含む茶褐粘土と地山の青灰粘土がブロックになったもので地山から30ca程度を測る。付近より壺形土器の底部破片が発見されている。

土橋 5-6 は堤 5-8 と堤 5-9 を連結する道状遺構である。長さ 7.25m、幅約 1.9m を測る。大溝 5-8 を分断する形で地山を掘り残し、盛土をもって形成される。盛土は炭化物を含む茶褐色粘土と地山の青灰粘土がブロックになったもので地山から 50cm 程度を測る。堤上から石織が 2 個体発見されている。

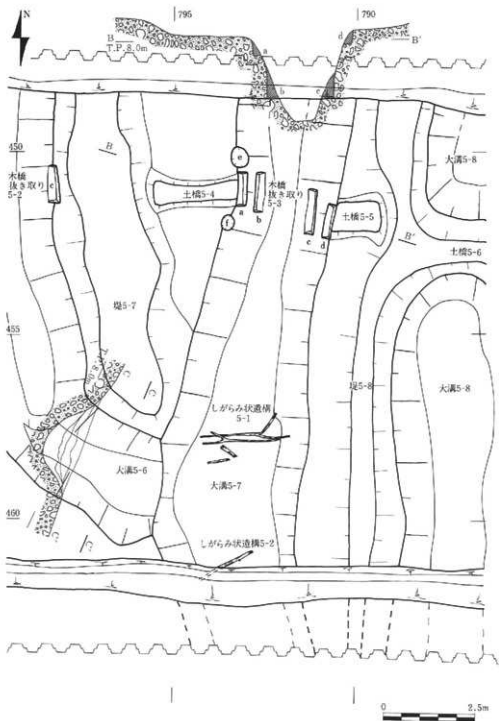
木橋抜き取り 5-1 は大溝 5-3 の底部から発見された 4 個の柱穴からなる。a・d は大溝の肩上面に位置し、肩部をほぼ垂直にカットし平坦面を作り出す。平坦面は幅 0.8m と 1m、奥行き 0.4m と 0.5m を測る。板を渡したのだろうか。b・c は大溝の掘り底で発見された柱穴で、底部の立ち上がりをほぼ垂直にカットして掘削されている。幅 0.9m と 1.1m、奥行き 0.35m と 0.4m を測る。b には柱痕跡がみられる。いずれの柱穴も抜き取られた後、青灰粘土と灰白粗砂で埋められており、大溝 5-3 上層の乳白粗砂を除去する段階まで検出できなかった。このことから大溝 5-3 上層の堆積はここにあった構築物の抜き取り以降であることがわかる。しかし、大溝 5-3 下層の堆積と抜き取りとの先後関係は明瞭にすることができなかった。

木橋抜き取り 5-2 は大溝 5-6 の底部から発見された 4 個の柱穴からなる。a・c は大溝の肩上面に位置し、木橋抜き取り 5-1 a・d 同様に肩部をほぼ垂直にカットし平坦面を作り出す。平坦面は幅 1m と 1.15m、奥行き 0.3m と 0.35m を測る。b は大溝の掘り底で発見された柱穴で、底部の立ち上がりをほぼ垂直にカットして掘削されている。幅 1.45m、奥行き 0.25m を測る。b に対応する東の柱穴はなかった。いずれの柱穴も抜き取られた後、青灰粘土と灰白粗砂で埋められており、大溝 5-6 上層の乳白粗砂を除去する段階まで検出できなかった。大溝 5-6 上層の堆積は木橋抜き取り 5-1 同様にここにあった構築物の抜き取り以降であることがわかる。

木橋抜き取り 5-3 は大溝 5-7 の底部から発見された 6 個の柱穴からなる。a・d は大溝の肩上面に位置し土橋に接する。木橋抜き取り 5-1 a・d 同様に肩部をほぼ垂直にカットし平坦面を作り出す。平坦面は幅 1m と 0.9m、奥行き 0.2m を測る。b・c は大溝の掘り底で発見された柱穴で、底部の立ち上がりをほぼ垂直にカットして掘削されている。幅 1.25m と 1m、奥行き 0.25m と 0.3m を測る。大溝 5-7 の西岸に接する形で 2 個の穴も発見されている。柱穴であったかどうかかわからない。埋め土は暗褐色シルト質粘土により、深さ 10cm 前後を測る。他の柱穴は抜き取られた後、青灰粘土と灰白粗砂で埋められており、大溝 5-7 上層の乳白粗砂を除去する段階まで検出できなかった。大溝 5-7 上層の堆積は木橋抜き取り 5-1 同様にここにあった構築物の抜き取り以降であることがわか



第25図 西区 第5遺構面遺構図1 (1/100)



第26図 西区 第5遺構面遺構図2 (1/100)

る。

しがらみ状遺構 5-1 は大溝 5-7 が大溝 5-6 と連結する部分に位置する。大溝 5-7 底部に直行して掘り底より約 10cm 上面に長さ 2.4m と 2.6m の二股に分かれた雑木を組み合わせたものである。その南に 2～3 の小枝がみられた。いずれも加工の痕跡はない。

しがらみ状遺構 5-2 はしがらみ状遺構 5-1 の南に位置するが調査の進行状態により(第 4 遺構面の排水溝掘削)、木組みの形態を確認できなかった。大溝 5-7 底部に直行して掘り底より約 10cm 上面に少なくとも 3 本以上の自然木が組み合っていた。

西区の東隅は大溝 5-8 の東に小区画水田とおもわれる足跡を残す空間がある。水田は土橋 5-6 から分岐する畦畔で 3 か所以上に分かれている。大溝の東側は土橋や木橋を通過して行き来できる生産域が広がっているものと推定できる。足跡は大溝 5-8 上層にも及んでいた。

6 第6遺構面（第28図上）

a. 水田遺構（図版51・52）

第6遺構面の基盤になる明青灰粘土は層厚が薄く、10cmに満たないものだった。この層を除去すると東区では無数の足跡に微砂が入りこんだ遺構面が現われた。遺構面は西区では確認できず、第5遺構面の形成以前に水田があった様子はない。

水田畦畔は短冊形に整然と並び、これまで発見された小区画水田の畦畔が地形に沿って蛇行するのに比べ、企画的である。

畦畔はどれも幅30cm前後、高さ5cm程度、畦畔の上に足跡は少なく、意図的に避けて歩行された様子がうかがえる。大畦畔に相当する突出した規模のものはみられない。大量に発見された足跡群は水田内を歩行したというより、水田土壌を攪拌する為に足踏みを繰り返したような折り重なりようだった。足跡は大人サイズのもののみられる長辺20cm弱のものから長辺10cmに満たない子供サイズのもの混在し、折り重なっていた。水田の労働に従事していた人々の構成がうかがわれる。

b. 出土遺物（第27図 図版65）

遺構面上面から石砲丁が見つかっている。石砲丁は緑泥片岩製、完形である。刃部は摩滅の痕跡が少なく、使用後廃棄された様子ではない。作業途中で置き忘れられたものか。長辺12.6cm、幅5.1cm、厚さ0.9cmを測る。

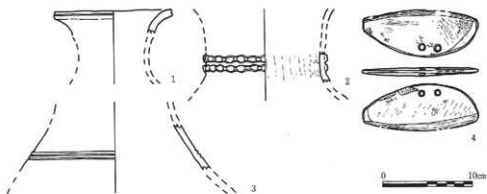
第27図1は口縁端部に一条の沈線をもつ壺形土器である。2は張りつけ凸帯を指圧によって刻み、くびれ部に巡らせた壺形土器である。3はヘラ描沈線と削り出しによる段をもつ壺形土器の体部である。これらの特徴から出土土器は弥生時代前期でも新段階に属すると考える。

7 第7遺構面（第28図下）

a. 発見された遺構（図版53）

第7遺構面の基盤になるオリーブ黒粘土を取り除くと青緑灰微砂層にあたる。この微砂層は土壌化が進んでおり、植物による小規模な生痕化石が多数みられる。上層の包含層中から縄紋時代晩期の土器片や石器を発見、この面を精査した結果、東区で緩やかな落ち込み等を確認した。

落ち込み7-1は東区の西半部に位置する。東から西に緩やかに落ち込み、掘り底に起伏は少ない。埋め土は黒褐粘土で多少の炭化物を含む。遺物はなく、自然に形成された可



第27図 東区 第6遺構面出土遺物実測図(1/4)

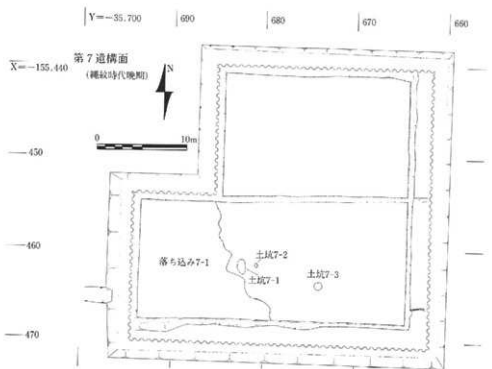
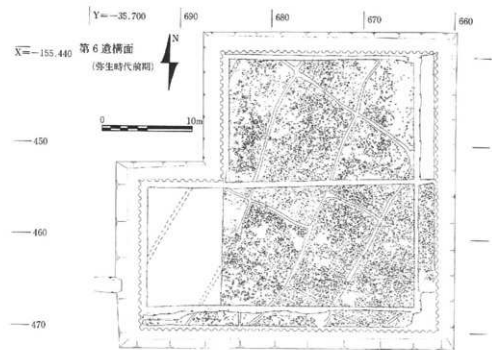
能性が高い。上りは不明瞭で土坑状のしみを3カ所確認している(土坑7-1・土坑7-2・土坑7-3)。埋め土は同じ黒褐粘土でいずれも浅い。出土遺物はいずれも上層の包含層中で遺構面直上からは発見できなかった。

b. 出土遺物(第29図)

第29図1は波状口縁をもつ浅鉢形土器である。山形の口縁部に沿って凸帯がめぐり、その下方を粗くヘラ削りする。色調は茶褐色、胎土は粗く石英粒や雲母片を含む。西区排水溝中から出土した。層位は明確でなく上層の包含層中の可能性もある。2はサヌカイトの剝片。自然面を多く残す。東区から出土した。3~5は深鉢形土器で長原式土器の特徴をもつ。3は刻み目凸帯を2重に施し、二段目より下方は粗くヘラ削りする。内面も削りの痕跡がみられる。4は口縁端部に刻み目凸帯を巡らす。焼きは甘く、淡乳褐色の部分と茶褐色の部分とがまだらになる。5は下半部の破片である。円板状の底部に粘土帯をつまみ上げて形成される。外面は粗いハケ目が残る。外面には厚く煤が付着していた。

前回までの発掘調査成果では、自然流路や包含層等から、弥生前期の土器と縄紋晩期(長原式土器)が発見されていた。今回の調査では第6遺構面の水田遺構を挟んで直上と上層から弥生時代前期の土器と石庖丁が、水田の基盤となる黒褐粘土層(いわゆる黒バンド)から縄紋時代晩期の土器が発見されるという層位的隔たりを確認した。また、これまでの調査を含め黒褐粘土の下層にある第7遺構面では自然流路や落ち込み等の発見にとどまり、顕著な生活の痕跡がみられない。このことは志紀遺跡に定住してきた人々を意義付ける上で重要な示唆となるだろう。

一方、近隣の田井中遺跡の集落遺構では弥生時代前期新段階の大量の土器や石器とともに少量の長原式土器が発見されている。黒褐粘土に包含されていた縄紋時代晩期の土器が上層に伴うものならば、田井中遺跡の集落同様、弥生時代の要素の中に縄紋時代の要素が



第28図 東区 第6遺構面・第7遺構面全体図 (1/400)

混じる結果を示すだろう。しかし、縄紋時代晩期の土器をもった人々が水田耕作出現以前あるいは直前に志紀遺跡を訪れているとするならば、弥生時代の要素の中に縄紋時代の要素が取り込まれる過程の一端を示す興味深い資料となるだろう。

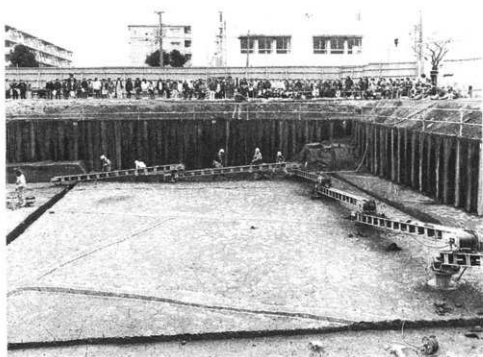
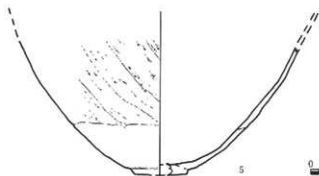
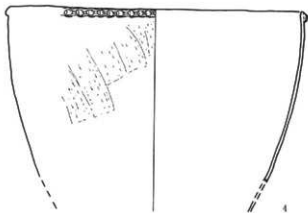
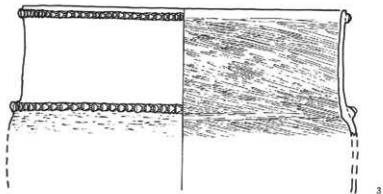
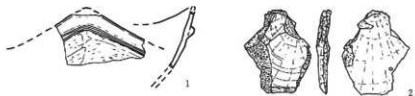


写真4 弥生時代前期水田遺構と地域の子供達



0 10cm

第29图 第7遺構面出土遺物実測図(1/4)

遺構面	水田数	測定水田数	長軸 (m) 短軸 (m) 面積 (㎡)	長軸 (m) 短軸 (m) 面積 (㎡)
古墳時代後期 (6 C 後)	49	17	7.25×7.6 =55.1 7.0 ×6.5 =45.5 8.25×5.3 =43.73 6.8 ×5.65=38.42 6.4 ×5.9 =37.76 6.05×6.15=37.2 7.75×4.75=36.81 7.55×4.8 =36.24 6.2 ×5.35=33.17	5.25×6.0 =31.5 6.85×4.35=29.8 4.65×6.0 =27.9 4.7 ×5.6 =26.32 4.6 ×4.65=21.39 4.25×4.1 =17.43 1.7 ×8.45=14.37 1.5 ×6.65=9.98 (平均31.918)
古墳時代後期 (5 C 後)	23	10	8.3 ×9.25=76.78 16.0 ×3.75=60.0 5.85×8.75=51.19 7.4 ×6.25=46.25 6.75×5.65=38.14 3.8 ×9.1 =34.58 5.65×5.75=32.49 4.2 ×5.75=24.15	5.65×3.65=20.62 3.75×3.5 =13.13 (平均39.73)
古墳時代中期 (4～5 C)	29	8	9.75×7.0 =68.25 7.0 ×5.4 =37.8 4.75×7.5 =35.63 4.25×6.25=26.56 4.0 ×6.15=24.6 6.6 ×3.65=24.09 5.5 ×4.35=23.93 3.0 ×7.65=22.95	 (平均32.98)
弥生時代中期 (B C 1 前後)	21	7	8.4 ×8.3 =69.72 12.4 ×5.5 =68.2 6.9 ×4.4 =30.36 5.75×3.75=21.56 5.0 ×4.1 =20.5 6.5 ×1.9 =12.35 5.5 ×1.0 =5.5	 (平均32.6)
弥生時代前期	15	4	13.35×7.5 =100.13 14.85×5.65=83.9 10.7 ×5.5 =58.85 8.1 ×7.2 =58.32	 (平均75.3)

第 2 表 各遺構面水田計測表

第V章 まとめ

a. 水田遺構から

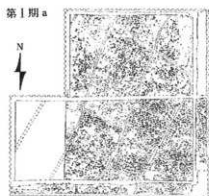
今回の調査で、志紀遺跡では連綿と水田耕作が続けられていたことが確認された。現時点では田井中遺跡から北東へ旧大和川の流路付近に至るまで400m四方に各時代の水田が拡がり、遺構はさらに南へも続いていることが把握できるに至った。

さて、志紀遺跡に展開する水田遺構はこれまでに示すとおり、3つの画期に分けることができる。

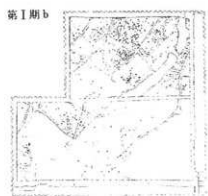
まず、第I期はこの地で水田開発をはじめた段階で第5遺構面、第6遺構面の弥生時代前期から中期に相当する。第I期の特徴は水利が未発達で流路が安定していないため、自然河川による遺構の削平がみられることである。今回の調査では自然流路が発見されなかったが、東区の水田遺構は当初、企画的に設計されたにもかかわらず、すぐに小区画を歪めた畦畔へと変更されている。これは大畦畔の方向にも影響を与えており、第5遺構面の大畦畔は調査区内で折れ曲がるような様相を示す。当初の畦畔が南西から北東に規則的に並ぶのは田井中遺跡の集落から延びる道路を兼ねていたからだろう。一方、西区では大規模な大溝を8条も掘削し、水利に対する思い入れの強さをうかがうことができる。

第II期は活発に小区画水田が営まれた段階で第4遺構面（4C～5C）、第3遺構面（5C後半）、第2遺構面（6C後半）の古墳時代前期から古墳時代後期後半に相当する。自然河川を水路に編成し、杭等を駆使して畦畔を補強している。今回の調査では東区に沼状遺構があり、これを回避する様に小畦畔を改変してゆく様子が窺っている。また、これまで古墳時代前期の様相が解明されていなかったが今回の調査で第4遺構面に4世紀の土器を含む溝が発見されたことから遺構面の時期の認識に幅をもたせる結果となった。

第III期は、荘園制の導入と土地制度の変革によってこの地に条里地割りにそった水田がみられる時期である。第1遺構面（平安時代末～鎌倉時代）とその上面に相当する。奈良・平安時代の様相は不明瞭で該当期の遺物を含む洪水層が厚く発達する。条里制水田自体、大規模な整地を伴っており、平安時代等の遺構を削平した可能性もある。畦畔は方位にのった直線的なものになり、間隔は10.9m（一反）で割り切れる。南北に延びる畦畔が優劣なことから1町四方を東西10等分する「長地形」の地割りを復元できる。鎌倉時代にまとめられた『醍醐寺文書目録』の記事では付近が「志紀北莊」であったことも判明しており、



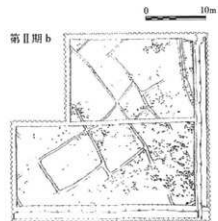
第6遺構面 (弥生時代前期)



第5遺構面 (弥生時代中期)



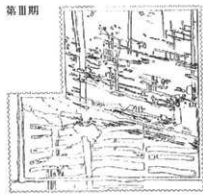
第4遺構面 (古墳時代前期・4～5C)



第3遺構面 (古墳時代後期・5C後)



第2遺構面 (古墳時代後期・6C後)



第1遺構面 (平安時代末～鎌倉時代)

第30図 東区 遺構変遷図 (1/600)



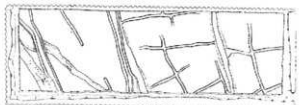
第Ⅰ期



第5遺構面 (弥生時代中期)

0 10m

第Ⅱ期 a



第4遺構面 (古墳時代前期・4～5C)

第Ⅱ期 b



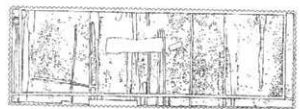
第3遺構面 (古墳時代後期・5C後)

第Ⅱ期 c



第2遺構面 (古墳時代後期・6C後)

第Ⅲ期



第1遺構面 (平安時代末～鎌倉時代)

第31圖 西区 遺構変遷図 (1/600)

醍醐寺による荘園開発を裏付ける遺構に位置付けられる。

次に調査区内の水田経営の変遷について考察する。

東区の調査では弥生時代前期の水田に大畦畔はみられない。しかし、小畦畔の方向から区画は南西から北東に向かって延び、区切られていたと予想できる。次の第Ⅰ期bの段階で東区東端に大畦畔がみられる。第Ⅰ期bの大畦畔は前段階と同様の方向に延びるが「く」の字形に折れ曲がり、当初の企画通りに地形を区画できなかったことを物語る。第Ⅱ期aになって大畦畔の方向は逆転する。すなわち、「し」の字形に折れ曲がる大畦畔は第Ⅱ期cでは完全に南東から北西向きに方向を変える。この時期の水田は当初の第Ⅰ期aと全く対称的な向きに小区画水田を配置する。これは単に地形によると考えるよりむしろ、大畦畔が道状の役目を兼ねていたことから集落の移動にかかわると考えたい。

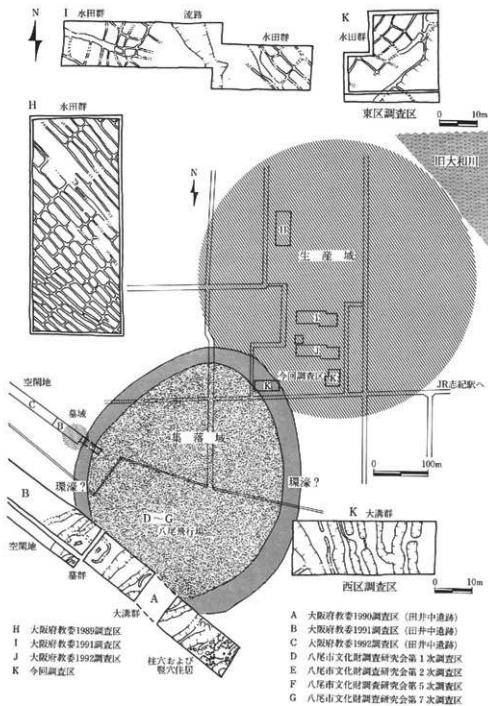
西区の調査でも大畦畔は前段階に形成された位置を踏襲して見いだすことができる。また、水路状の遺構も大溝群の方向とほぼ同じくして継続される。しかし、第Ⅱ期cの時代には水路はなくなり、水田の区画も地形を細かく区切って耕地にした様相が良くわかる。

西区は弥生時代中期に掘削された大溝群の下層からは水田が発見されていない。水田は大溝群と時を同じくして現われる。

b. 大溝群

西区調査区では水田がとぎれ、8条の大溝が整然と並んだ状態で発見された。大溝は掘った土を両岸に築き固め、土壇状に盛り上げ堤としていた。堤上からは弥生時代中期の土器とともに石鎌が発見されている。堤は両サイドの大溝を共有する形でつくられ、大溝を分断して土橋によって連結する部分もある。また、堆積層に酷似する重なりがみられることから8条の大溝はほぼ連続的に同時期に開削され、同様に埋没したと推定できる。大溝の底からも弥生時代中期の土器片が発見されている。大溝群は最終的に弥生時代後期の土器を含む洪水によって堤ごと埋没していた。このことから大溝群の開削時期は弥生時代中期前半、廃絶は弥生時代後期を降らないことがわかる。

大溝群はよどんだ水が流れることなくゆっくり堆積した状況を示す炭化物を含む粘土層を下半部に堆積していた。一方、上半部の堆積層は流水とともに運ばれた土砂が幾重にも折り重なって堆積し、埋没前に水路となっていたことがうかがえる。このような堆積状況はどの大溝にもみられ、大溝が同時期に同様の機能をもって存在したことを示唆している。また、大溝5-2・5-4・5-5・5-8は地面を掘り残した土橋によって分断され、歩いて渡れる施設をつくりだしていた。土橋の延長上に位置する大溝5-3・5-6・5



第32図 弥生時代中期の集落域・生産域想定図

ー7からは木橋が架けられていた痕跡とそれを抜き取った痕跡が明瞭に残っていた。これらの施設は調査区の東西へと続いており、大溝群を横切って集落域から水田域へと移動する道だったと推定できる。

c. 発見された大溝群の意義

今回調査区の約300m西でおこなわれた田井中遺跡の調査では弥生時代中期の溝が7条、北東方向に向かって掘られていることが確認されている。この溝群の西側では竪穴式住居等の建物群が切りあう集落域があり、大溝群の東では組み合わせ木棺を主体部とした墓による墓域があった。今回発見された大溝群は北西方向に掘られており、同時期に存在する二つの大溝群をつなげると集落域をめぐる環濠の可能性が高くなる。集落の存在を示す竪穴住居等は八尾飛行場内でおこなわれた発掘調査でも多数確認されており、今回の調査を併せ直径300m以上の環濠を多重にめぐらせた環濠集落があったと予想できる。集落は環濠を挟んで北東に拡がる水田を生産域に発展したのだろう。

志紀遺跡は度重なる旧大和川の洪水と戦いながら弥生時代から鎌倉時代に至るまで連続と農業が営まれてきた痕跡を残していた。今回はさらに、2000年以上前に農業を営んでいた人達がどこに暮らしていたかを物語る大溝の一部を確認した。8条の大溝は整然と並び、掘った土は土壇状に築き固められ堤となっていた。それは収穫された米や生産に携わる人達の暮らしを守る砦の役目をしていたと考えられる。

d. おわりに

今回、調査及び現地説明会では、井上孝司・浦 恭子・大坪武志・河原由加子・高野綾子・中川寿美・中村晶子・松吉精一・村上律子緒氏の参加協力がありました。記して謝辞します。(50音順・敬称略)

付載 志紀遺跡 (93-西区) における花粉・珪藻分析

川崎地質株式会社 (担当者: 渡辺正巳)

はじめに

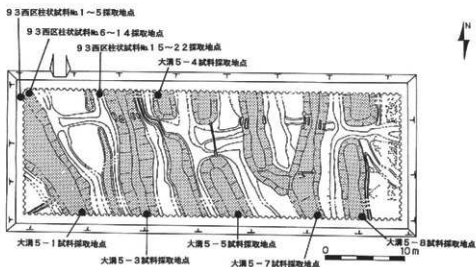
志紀遺跡は、大阪府中部の八尾市志紀に所在する、弥生時代中期から鎌倉時代に至る水田遺構を中心とする遺跡である。今回調査を実施した93西区の調査において、第5遺構面より8条の大溝が検出された。これらの大溝は、河内地方の弥生時代中期の環濠とするならば、例を見ない規模のものである。そこでこれら大溝の性格を明らかにするために、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の委託を受け、川崎地質株式会社 が花粉分析・珪藻分析を実施した。

試料について

第1図に示す各地点で、川崎地質株式会社 が試料採取を行った。それぞれの地点での試料採取層準は、第4～10図の花粉ダイアグラム中に示している。また大溝5-2・5-6では良好な試料が得られなかったため、分析を行わなかった。

分析方法および分析結果

花粉分析方法および珪藻分析方法を第2・3図に示す。また、花粉分析結果を第4～10



第1図 花粉分析試料採取地点

図の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を第11～16図の珪藻ダイアグラムおよび珪藻総合ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、木本花粉・草本花粉について百分率で表した。また花粉含有量が少なく木本花粉検定数が100に満たなかった試料では、出現した花粉化石の種類を*で示した。また、珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数にし、各種類について百分率で表した。

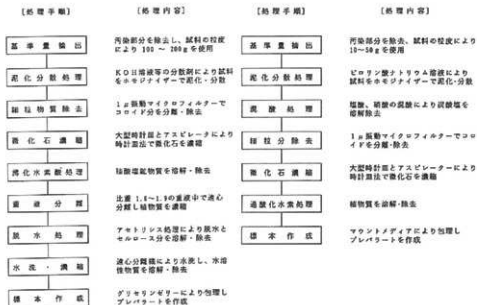
花粉帯の設定

① 垂直変化

トレンチの西壁を中心とした3地点22試料(第1図)の分析結果から、以下のように花粉分帯を実施した。

I帯(試料No.1～4)

木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)の出現率が76%以上、草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)の出現率が65%以上の高率を示す。これらのうち、試料No.1～3ではアブラナ科も100%を越す高率となる。さらに、試料No.1ではスギ属の出現率が16%と他の種類に比べ高率となる。これらのことから、I帯をa亜帯(試料No.1)、b亜帯(試料No.2、



第2図 花粉分析処理フローチャート

第3図 珪藻分析処理フローチャート

3)、c 亜帯 (試料No.4) に細分した。

II 帯 (試料No.5～8)

木本花粉ではマツ属 (複雑管束亜属) が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、スギ属などの温帯針葉樹や、アカガシ亜属が10～20%程度の出現率を示す。草本花粉ではイネ科 (40ミクロン以上) の出現率が74%以上の高率を示す。

III 帯 (試料No.9～14)

アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、スギ属などの温帯針葉樹やシイノキ属が数～10数%の出現率を示す。草本花粉ではイネ科 (40ミクロン以上) やヨモギ属が、試料により50%を超える高率となる。これらの試料のうち試料No.11・12では、スギ属が30%程度、ヨモギ属も50～90%という高い出現率を示す。このことから、III 帯を a 亜帯 (試料No.9, 10)、b 亜帯 (試料No.11, 12)、c 亜帯 (試料No.13, 14) に細分した。

IV 帯 (試料No.17～21)

アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、特徴的に出現する種類はない。また草本花粉もほとんど出現しない。これらの試料のうち、試料No.17ではアカガシ亜属の出現率が85%と特に高く、試料No.18～21ではスギ属などの温帯針葉樹がやや高率となる。このことから、IV 帯を a 亜帯 (試料No.17) と b 亜帯 (試料No.18～21) に細分した。

② 大溝の花粉組成

いずれの大溝から得られた花粉組成も、アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示し、スギ属などの温帯針葉樹を伴うなど、上記のIII 帯 a・c 亜帯と同様な花粉組成を示す。このことは、現地の堆積状況の観察 (財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1994) で試料No.9～14 (III 帯) の堆積時期が大溝の埋積時期とほぼ一致することと、矛盾しない。

珪藻帯の設定

試料間に有為な差が見られた地点が大溝5～7のみであったことから、大溝5～7について、珪藻分帯を実施した。

I 帯 (試料No.4, 5)

Pinnularia giba, *Gomphonema acuminatum*などが他の種類に比べ高い出現率を示す。

II 帯 (試料No.6)

Gyrosigma spp. が他の種類に比べ高い出現率を示す。

大溝 5-3・5-5 では、*Gomphonema acuminatum*、*Stauroneis phoenicenteron* *Epicemia turgida* が他の種類に比べ高い出現率を示す。

古環境変遷

花粉帯を基に志紀遺跡での古環境の変遷を推定する。また、花粉帯の示す時期は本文にしたがった。

① IV 帯期（縄紋時代晩期）

遺跡周辺の平地から生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓にかけて、カシ類を要素とする照葉樹林が広く分布していたと推定できる。また、これらの山地の山腹から山頂にかけては、スギなどの温帯針葉樹を要素とする中間温帯林が分布し、山頂部にはブナ（現在の分布から推定）を要素とする冷温帯林の分布が推定できる。

遺跡周辺は、IV 帯期前期（b 亜帯期）にはガマ属、セリ科、カヤツリグサ科、イネ科を要素とする湿地が広がっていたと推定できる。一方、b 亜帯でスギ属がやや高率になる原因として、この様な湿地にスギが生育していた可能性がある。しかしスギ属がやや高率になる原因には、広域的な気候変動にともなう中間温帯林の拡大なども考えられ、このことについての結論は今後の課題として残る。

一方、a 亜帯では草本花粉がほとんど検出できなかったことから、IV 帯期後期（a 亜帯期）の遺跡周辺の環境推定はできなかった。

② III 帯期（弥生時代前期～古墳時代前期・4～5 世紀後半）

IV 帯期（縄紋時代晩期）に比べ、カシ類を要素とする照葉樹林が縮小し、スギなど温帯針葉樹を要素とする中間温帯林が拡大したと推定できる。いわゆる「弥生の小海退期」に相当し、気温の低下や降水量の増加が予想され、IV 帯中期（b 亜帯期）が最盛期であったと考えられる。一方イネ科（40ミクロン以上）の出現率の急激な増加や、水田遺構が検出されていることから、この時期以降、遺跡内での稲作が始まったと推定できる。

III 帯期前期（a 亜帯期）は、大溝が存在した時期と一致する。大溝内の堆積物からは、サジオモダカ属、オモダカ属、ガマ属などの水性植物の花粉が検出される一方、ゴキズル属—アマチャズル属など水辺に生育する可能性のある植物も検出される。さらに珪藻分析では、ほとんどの試料で沼沢湿地付着生群集の *Gomphonema acuminatum*、*Stauroneis phoenicenteron* などに広布種の *Epicemia turgida* などを伴うことから、沼沢地的環境が推定

される。しかし大溝5-7の上部(1帯)では、沼沢湿地付着生群集の*Pinnularia giba*や、広布種の*Eumotia pectinalis*、*Stauroneis phoenicenteron*などが検出され、湿地的環境が推定される。このことから、大溝が埋まるにつれ水深が浅くなったことが推定できる。またいずれの試料でも流水種がほとんど検出されないこと、堤を結ぶ陸橋が存在することなどから、水の流れはほとんどなかったと推定される。以上のことから、大溝内は滞留した浅い水域であり、そこにはサジオモダカ、オモダカやガマなどが生育していたと推定できる。また堤には、ヨモギや、ゴキズル、ツタなどが茂っていたと推定できる。

③II帯期(古墳時代後期～鎌倉時代)

生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓にかけては、アカマツ(現在の植生から推定)を要素とする二次林の分布域が急激に拡大する一方、カシ類を要素とする照葉樹林の分布域が縮小したと推定できる。併せて、III帯期に分布域の拡大が推定される中間温帯林も分布域を縮小したと推定できる。また、山頂部にはブナを要素とする冷温帯林の分布が推定できる。

一方、イネ科(40ミクロン以上)の高率で安定した出現や、水田遺構が検出されていることから、この時期では連続的に稲作が行われていたと推定できる。また、この時期の後半にソバの栽培が行われていた可能性がある。

④I帯期(鎌倉時代～)

生駒山地や石川上流の葛城・金剛山地の山麓～山腹にかけて、アカマツを要素とする二次林が広く分布していたと推定できる。一方、カシ類を要素とする照葉樹林や、スギなどの温帯針葉樹を要素とする中間温帯林は、限られた地域にのみ分布していたと推定される。

一方、イネ科(40ミクロン以上)の高率で安定した出現から、稲作が行われていたと推定できる。また、I帯期中期(b亜帯期)には、アブラナ科が高率で出現し、ワタ属も数%の出現率を示す。アブラナ科の高率出現は、大阪府南部地域では16世紀以降に主に見られる現象であり(藤田ほか 1991)、イネ科(40ミクロン以上)、ワタ属と共に検出されることから、栽培の「アブラナ(ナタネ)」に由来するものと推定できる。またワタは、大阪府内では室町時代後期(A.D.1521)以降に栽培が定着されていたと推定されており(武部 1981)、これに由来すると推定できる。またワタが検出できたことから、I帯期中期(b亜帯期)は室町時代後期以降に相当する可能性が高い。さらに、I帯期後期(a

亜帯期)でのスギ属の出現率の増加をスギ植林の影響によると推定すると、I帯期後期(a亜帯期)は近代以降に相当する可能性が指摘できる。

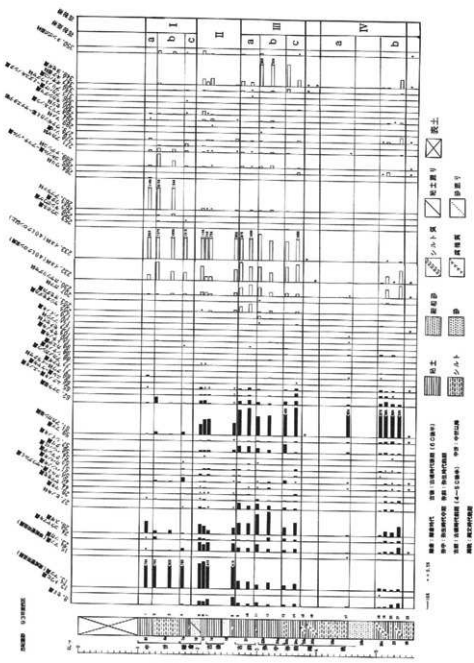
まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

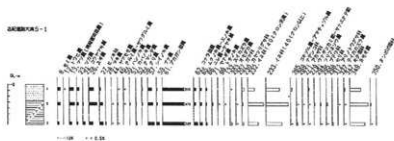
- ① 花粉分析結果からI～IVの4花粉帯を設定し、さらにI、III帯をa～c亜帯、IV帯をa、b亜帯に細分した。また、大溝内の分析試料はいずれもIII帯に対比可能であった。
- ② IV帯期(縄紋時代晩期)からI帯期(鎌倉時代～)にいたる、遺跡周辺の環境変遷を推定した。
- ③ 花粉分析結果および珪藻分析結果から、大溝内の古環境を推定した。また花粉分析結果から、堤の古植生も推定した。
- ④ 従来では検出されていなかったワタ属の花粉が検出され、志紀遺跡内でも鎌倉時代以降(おそらく室町時代以降)綿花栽培が行われていたことが明らかになった。
- ⑤ 従来では認められなかったアブラナ科花粉の高率での出現が認められ、綿花栽培と同時期に、アブラナ(ナタネ)栽培も行われていたと推定される。

引用文献

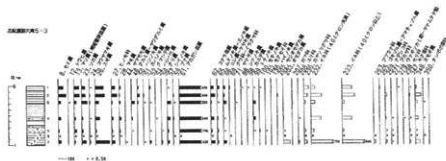
- 藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳(1991)「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」
『日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨』33-34。
武部善人(1981)『河内木綿史』P.275 吉川弘文館 東京



第4図 志紀遺跡(93西区)の花粉ダイヤグラム



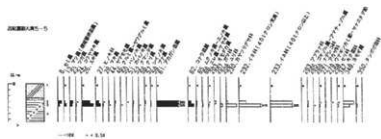
第5図 大溝5-1の花粉ダイアグラム



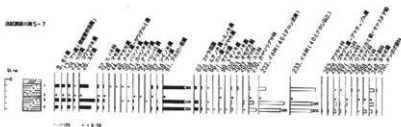
第6図 大溝5-3の花粉ダイアグラム



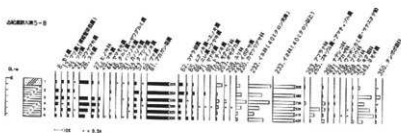
第7図 大溝5-4の花粉ダイアグラム



第8図 大溝5-5の花粉ダイアグラム



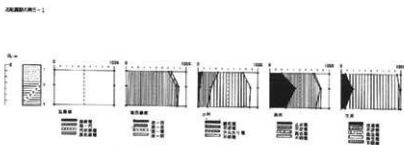
第9図 大溝5-7の花粉ダイアグラム



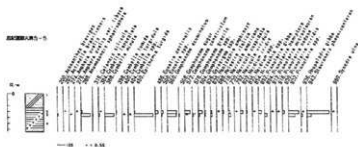
第10図 大溝5-8の花粉ダイアグラム



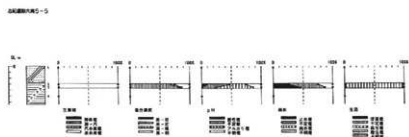
第11図 大溝5-1の珪藻ダイアグラム



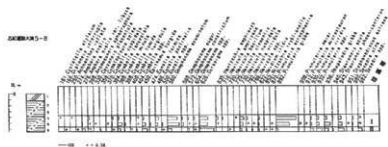
第12図 大溝5-1の珪藻総合ダイアグラム



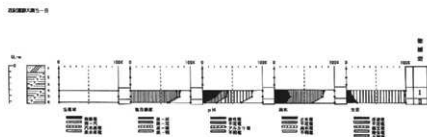
第13図 大溝 5-5 の珪藻ダイアグラム



第14図 大溝 5-5 の珪藻総合ダイアグラム



第15図 大溝 5-8 の珪藻ダイアグラム



第16図 大溝 5-8 の珪藻総合ダイアグラム

図

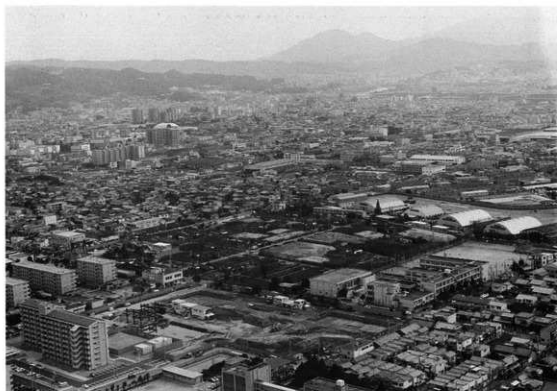
版



弥生前期の水田と足跡



a. 遺跡遠景（北から）左 大和川・右 新大和川



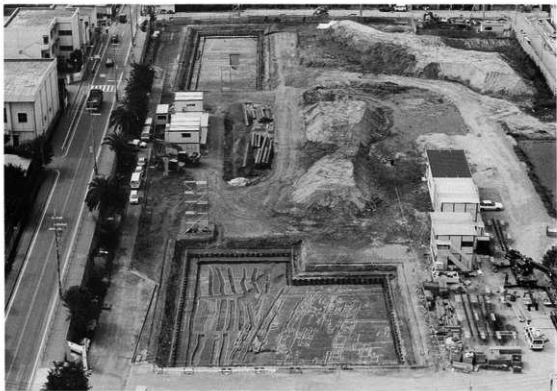
b. 遺跡遠景（北から）左 信貴山系・右 二上山系



a. 遺跡近景（西から）左 高安千塚・右 平尾山古墳群



b. 遺跡近景（東から）左 古市古墳群



a. 第1遺構面（平安時代末～鎌倉時代）東から



b. 第2遺構面（古墳時代後期・6C後）東から



a. 第3遺構面（古墳時代後期・5C後）東から



b. 第4遺構面（古墳時代前期・4～5C）東から



a. 第5遺構面（弥生時代中期）東から



b. 第5遺構面（弥生時代中期）西から